

星岡遺跡

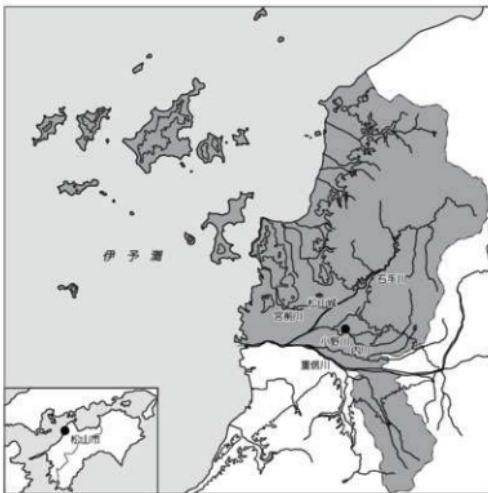
- 1次・3次調査 -

2015

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

星岡遺跡

- 1次・3次調査 -



2015

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、平成19年度と22年年度に実施した星岡遺跡の発掘調査（1次調査及び3次調査）の報告書です。

一連の調査の結果、市内有数の規模を有し、かつ長期にわたって存在した福音寺周辺の遺跡群について、より一層詳しく考察するための情報を得ることができました。特に3次調査で確認した平安時代後期の掘立柱建物跡は、この地域では数少ない調査事例です。

このような成果が得られましたのも、発掘調査にご協力いただきました地権者をはじめ近隣の皆様のご理解とご協力の賜物と感謝し、心より厚くお礼申し上げる次第です。また、本書が文化財保護意識の向上と埋蔵文化財調査・研究の一助となり、末永くご活用いただければ幸いに存じます。

平成27年3月

松山市教育長

山本 昭弘

例　　言

1 本書は平成19年と同22年の各年度に、財團法人松山市生涯学習振興財團(当時、以下、旧財團という。)と、合併後の財團法人松山市文化・スポーツ振興財團(以下、新財團という。)の埋蔵文化財センターが実施した、愛媛県松山市星岡一丁目における2件の発掘調査成果をまとめたものである。

2 いずれも開発に伴う事前の本発掘調査である。

3 各調査の概要は次のとおりである。

遺跡名称	所在地	面　積	工事の目的
星岡遺跡1次調査	星岡一丁目630番1・634番1	約124m ²	宅地造成
星岡遺跡3次調査	星岡一丁目602番1	約138m ²	宅地造成

4 本書の作成業務は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團(以下、公益財團という。)が松山市から受諾している指定管理業務の一環として、平成26年度に実施した。本書の刊行主体は公益財團である。

5 各調査と報告書執筆の担当は以下の財團職員である。

星岡遺跡1次調査　　調　査:橋本　雄一・大西　朋子　執　筆:橋本　雄一

星岡遺跡3次調査　　調　査:水本　完児・大西　朋子　執　筆:水本　完児・宮内　慎一

6 本書の編集は橋本が担当した。

7 写真撮影ならびに写真図版の撮影は、財團の大西朋子が担当した。写真図版はすべて等倍に焼き付けた版下原稿をスキャナー分解(175線)して作成した。

8 遺構図に座標値を付す場合には、世界測地系2000に基づいている。

9 遺物と図面、写真等の記録については、松山市立埋蔵文化財センターにて保管されている。

10 近隣における調査の中で、既に報告書を刊行しているものについては、必要に応じて第1表や章末の注にて示した。未報告調査については、「松山市埋蔵文化財調査年報」(以下、「年報」という。)を参考資料として提示している。これらの成果報告に本文中で言及する場合、報告書は「第○集」、年報は「年報○」と表記する。

11 報告書抄録は巻末に掲載している。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 報告書刊行に至る経緯	1
第2節 組織	2
第3節 立地と歴史的環境	2
第2章 星岡遺跡1次調査	7
第1節 調査に至る経緯とその後の経過	7
第2節 調査組織と調査の方法	8
第3節 調査成果の概要と層位	10
第4節 遺構と遺物	10
第5節 まとめ	22
第3章 星岡遺跡3次調査	23
第1節 調査に至る経緯とその後の経過	23
第2節 調査組織と調査の方法	24
第3節 調査成果の概要と層位	26
第4節 遺構と遺物	30
第5節 まとめ	40

挿図目次

第1章 はじめに		第3章 星岡遺跡3次調査	
第1図 遺跡の位置	3	第18図 調査地の位置	23
第2図 周辺の遺跡	4	第19図 遺構の配置	27
第3図 付近における調査状況	5	第20図 北壁・南壁土層	28
第4図 1次と3次の位置	6	第21図 西壁土層	29
		第22図 掘立1	30
第2章 星岡遺跡1次調査		第23図 掘立1(S P 101)	30
第5図 1次調査の基準点	9	第24図 掘立1出土遺物	31
第6図 T 1 の遺構と遺物	11	第25図 掘立2	32
第7図 S B 007	12	第26図 掘立2出土遺物	33
第8図 T 2	14	第27図 S D 1	34
第9図 掘立002・003	15	第28図 柱穴(1)	35
第10図 T 2 西北部住居址群	16	第29図 柱穴(2)	36
第11図 S K 004	17	第30図 柱穴(3)	37
第12図 T 2 その他の出土遺物	17	第31図 柱穴(4)	38
第13図 T 3	18	第32図 柱穴(5)	39
第14図 掘立001	19	第33図 柱穴出土遺物(1)	40
第15図 S B 005	20	第34図 柱穴出土遺物(2)	41
第16図 S B 005出土遺物	21	第35図 地点不明出土遺物	41
第17図 T 3 東トレーナー出土遺物	22		

表目次

第1表 近隣の既往調査	1	第7表 9次掘立2	
第2表 9次掘立柱建物一覧	42	出土遺物観察表(錢貨)	45
第3表 9次溝一覧	42	第8表 9次柱穴	
第4表 9次柱穴一覧	43・44	出土遺物観察表(土製品)	46
第5表 9次掘立1 出土遺物観察表(土製品)	45	第9表 9次地点不明	
第6表 9次掘立2 出土遺物観察表(土製品)	45	出土遺物観察表(土製品)	46
		第10表 9次地点不明	
		出土遺物観察表(石製品)	46

写真図版目次

図版1

- 1 1次調査地遠景
- 2 T 1 西部調査状況

図版2

- 1 T 1 西部検出状況
- 2 S B 007周辺検出状況
- 3 T 1 北壁土層
- 4 S B 001-002カマド断面

図版3

- 1 T 2 全景
- 2 掘立002-003調査状況
- 3 T 3 全景

図版4

- 1 掘立001
- 2 S B 005床面

図版5

- 1 1次調査出土遺物(1)

図版6

- 1 1次調査出土遺物(2)

図版7

- 1 3次調査地から松山城を望む

図版8

- 1 調査区全景
- 2 北部完掘状況

図版9

- 1 調査区北部から1次調査地を望む
- 2 調査区北端検出状況

図版10

- 1 南壁土層と擾乱状況
- 2 調査区南部完掘状況

図版11

- 1 着手前の全景
- 2 造成土掘削状況
- 3 作業状況

図版12

- 1 3次調査出土遺物

第1章 はじめに

第1節 近隣の既往調査との関係

(1) 遺跡名称について

本書にて報告する星岡遺跡1次、同3次の各調査地は、松山市中心部の松山城から東南東方向に約3.3kmほど離れた場所に立地している(第1図)。この遺跡は、隣接する福音小学校構内遺跡¹(第36図)を中心とする福音寺遺跡群を構成する遺跡のひとつであるが、遺跡群の中心域の西南端部に立地する遺跡であるため、遺構密度はさほど高い区域ではない。

星岡遺跡の名称は、遺跡群の中心部を占める福音小学校構内遺跡と筋違遺跡周辺に、小字名を遺跡名称とした調査地点が複数に入り乱れてわかりにくいうことから、1次調査を契機として新たに付けられた遺跡名称で、今後、同町内における調査に際してはこの名称で統一するものとしている。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地の名称としては、「Na116 川付遺物包含地」に立地している。また、星岡遺跡の名称は、新規に調査が生じた場合に連番で次数を振るものとしていることから、過去の小字名に基づいた名称はそのまま使用しており、これらについて星岡遺跡として改めて連番の次数を付け直して読み替えるには至っていない。

1次と3次の各調査地は、国道11号の南西に隣接している(第3図)。この国道を造る際にも発掘調査が行われているが、近世の久米村と石井村の村界を境として、北の旧久米村の区域を福音寺遺跡、旧石井村の範囲を星ノ岡遺跡と呼び分けたようである(第3図)。国道関連の調査については、報告書²は刊行されているものの、各調査地の正確な位置がわからない場合が多いが、わかる範囲で第3図などに反映させた。福音寺遺跡筋違A区とB区の位置はかなり正確であるが、星ノ岡遺跡旗立A~C区については調査区の外周すら不明で、堅穴建物と泉との位置関係を記した文章を参考に合成したものである。

(2) 星岡遺跡2次調査との関係

本書にて報告する星岡遺跡1次調査地のすぐ南東に隣接する場所に同2次調査地が立地する(第4図)。この遺跡については、同じく国庫補助を受けて調査と整理が行われた星岡登立遺跡2次調査(第3図)とあわせて、平成24年2月に報告書が刊行されている(『第154集』)。その際、1次調査の成果の概要を提示した経緯がある。

遺跡略称	調査対象地	調査期間(平成)	面積(m ²)	担当	種別	報告書
星岡登立1次	星岡町597番-601番1-601番3	元年8月18日~同年9月30日	1123	栗田正房	民間契約	年報Ⅲ
星岡登立2次	星岡町684番2~684番5・684番10~684番11	9年10月1日~4年1月13日	443	栗佐久久	国庫補助	154集
星岡1次	星岡一丁目630番1・631番1の各一部	19年9月10日~4年10月9日	約124	橋本ほか	民間契約	本書
星岡2次	星岡一丁目623番1の一部	19年11月1日~同年11月22日	約188	橋本ほか	国庫補助	154集
星岡3次	星岡一丁目602番1	22年12月1日~23年1月7日	約138	水本ほか	民間契約	本書

第1表 近隣の既往調査

第2節 組織

本書の作成業務は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團（以下、公益財団という。）が松山市から受諾している指定管理業務の一環として平成26年度に実施した。平成19年度に、旧財團が松山市立埋蔵文化財センターの指定管理者となったことに伴って、過去の未報告調査の報告書刊行や『年報』の作成を受諾している。なお、国庫補助事業として実施された発掘調査の報告は、別途、国庫補助を受けて松山市教育委員会が刊行主体となる形で作成されている。

平成26年度の報告書作成と刊行業務は、以下の体制で実施した。なお、調査組織については、次章以降の各章に個別の調査ごとに掲載している。

平成26年度報告書刊行組織（平成26年4月1日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團

理 事 長	中山紘治郎
事 務 局 局 長	中西 真也
次長兼総務部長	紺田 正彦
施設利用推進部 部 長	玉井 弘幸
埋蔵文化財センター 所 長	田城 武志
(編集担当) 主 査	橋本 雄一
主 任	水本 完児
(写真担当) 調 査 員	大西 朋子

第3節 立地と歴史的環境

（1）遺跡の立地

星岡遺跡を含む福音寺遺跡群は、高縄山系の山々の麓に程近い道後平野の東北部に位置している。その場所は、松山市中心部の松山城から南東方向に約3.3kmほどのところである（第1図）。南東約1.5kmに古代の役所跡と来住庵寺で有名な久米官衙遺跡群³が位置しており、小野川がこの遺跡群の南面から星岡遺跡の近くを蛇行しつつ西へ流れている（第1図）。この小野川には北東方向から川附川という小河川が合流するが、その地点は、星岡遺跡から西におよそ1kmの地点で、付近には東山や土龜山といった幾つかの独立丘陵が点在する。

遺跡が立地する場所は、南東方向に独立丘陵群のひとつである星岡山、北西には土龜山が望める場所で、広い範囲で見ると東から西、あるいは北から南へ傾斜する地形である（第2図・第3図）。遺跡付近から両丘陵の間、つまり南西ないし西方向を眺めると、丘陵群の間の低地には現在でも市街化調整区域としての水田が広範囲に維持されており、往時の情景を偲ぶことができる。

(2)周辺の遺跡

両遺跡の周辺地区において本格的な発掘調査が行われるきっかけとなったのは、国道11号バイパス(松山東道路)建設に伴う事前調査であった。2現場に程近い福音寺町と星岡町、北久米町にかけての工区においては、昭和49年(1974年)1月から同年8月にかけて、3遺跡8地区で発掘調査が実施され、この中には、獸形柄頭木製品や古墳時代中期頃の木製農具や建築部材が出土した福音寺遺跡竹ノ下地区も含まれている。その後、北久米町にかけてのバイパス沿線と、伊予鉄道横河原線福音寺駅周辺における民間開発などに伴って、度々、発掘調査が行われている。

このほか、本書掲載の2遺跡を評価する上では、隣接する福音小学校構内遺跡とその西に展開する筋達遺跡が特に重要である。福音小学校構内遺跡は、新設校の建設に先立って平成元年度に予定地の全面調査が行われたもので、弥生時代から古墳時代を中心とする大規模な集落遺跡として知られている。計110棟を超える竪穴建物に加えて、掘立柱建物も多数検出されているほか、蛇紋岩製の子持勾玉が出土している。一方、小学校の西から南西に展開する筋達遺跡は、先に述べた国道11号線のバイパス建設に先立つ一連の調査の際に、星岡遺跡の北に隣接する地点において2地点で調査が行われて以降、今日までに計17次に達する本格調査が実施されている。この遺跡の場合、特に福音寺駅周辺の調査地点において、古墳時代中期以降と考えられる総柱構造の倉が多く検出されていることから注目される。



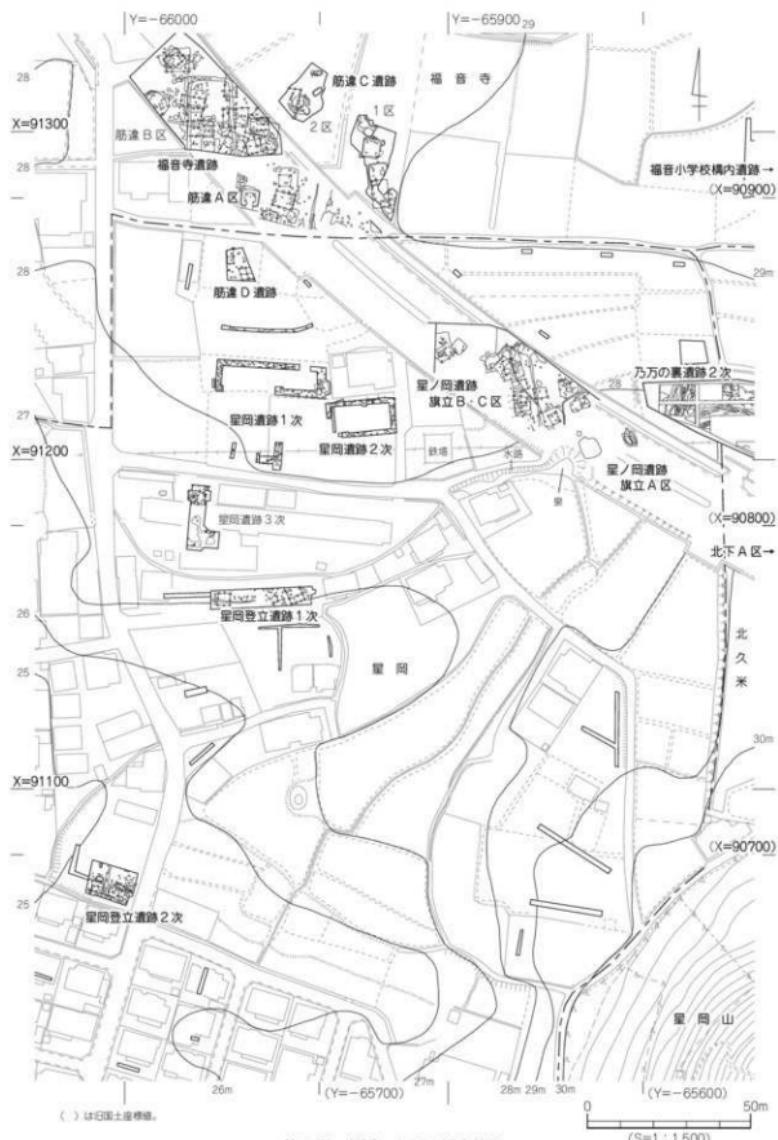
第1図 遺跡の位置

古墳では、隣接する独立丘陵である星岡山の南端に立地する西山古墳（全長約24.5mの前方後円墳）星ヶ岡山からうらへんとのほか、北久米淨蓮寺遺跡に隣接する二つ塚古墳の存在が重要であるが、紙幅の関係上、割愛する。詳しく述べは『第154集』を参照されたいが、これらの古墳と、隣接する北久米淨蓮寺遺跡から福音小学校構内遺跡、筋違遺跡にかけての福音寺遺跡群の中核を成す集落との併行関係をどのように考えるかが、一帯の歴史を復元する上で重要な視点となる。

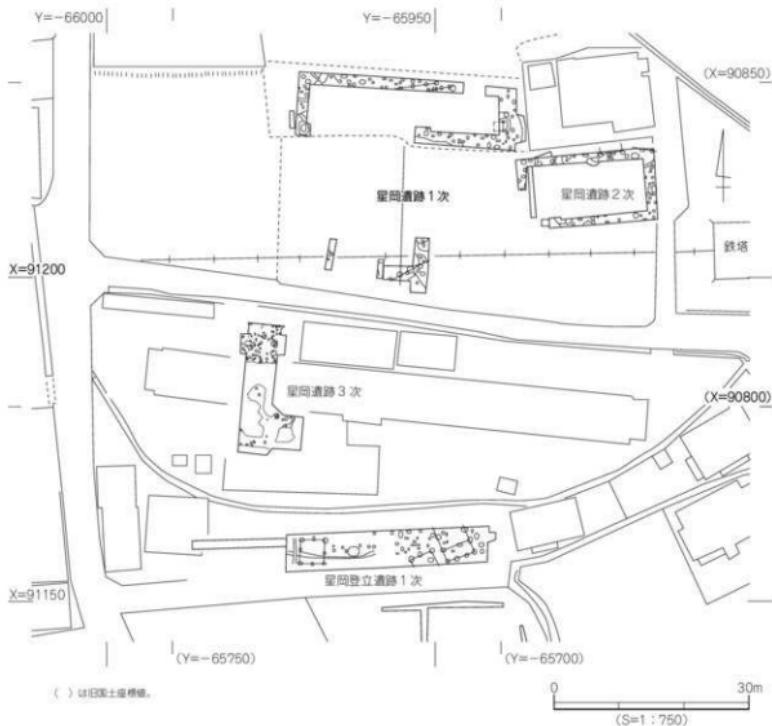
一方、飛鳥時代から平安時代にかけての遺構や遺物の事例は多くない。これは、7世紀代に隣接して久米官衙遺跡群が成立することと大いに関係があると考えられるが、とりわけ遺構密度が高い福音小学校構内遺跡において、該当時期の建物の抽出が十分でなく、識別されていないことによるのではないかとも思われる。確かに、本書にて報告する1次調査の掘立002と003や、星岡遺跡2次調査地の掘立001などがその候補として挙げられる程度であるが、断片的な調査成果においてもこのように一定程度の遺構は存在することから、福音小学校構内遺跡を含む近隣における傾向を反映しているものと評価したい。本書で報告する3次調査の掘立2の存在は、出土遺物から時期が判明した点でも重要である。

本書掲載の2地点における中世に関する成果は結果的に希薄であったが、星岡地区は古戦場として知られていることから、付近の遺跡において重要な要素である。「第154集」をまとめるにあたっては、隣接する星岡立遺跡2次調査で検出された中世集落の柱穴から、焼土や炭化物が多く検出されたことをとらえて、鎌倉幕府が滅亡へ向かう動乱の時期にこの地が戦場となった歴史を反映している可能性に言及した経緯があるので、以下、簡単にまとめておく。





第3図 付近における調査状況



第4図 1次と3次の位置

鎌倉幕府の長門探題北条時直の軍勢と朝廷方に組する土居、得能、忽那、大祝らの軍勢との間で、西暦1333年（元弘3年）3月に星岡山周辺を主戦場として戦が行われた。伊予に上陸した探題の軍勢が、当時、土居氏が本拠地としていた南の土居地区の攻略を目的として陣を敷いたのがこの地であったと伝えられている。戦いは幕府方の敗北に終わるが、京都六波羅探題をはじめとする幕府方の動搖は大きく、足利高氏（尊氏）の西国下向とその後の謀反、六波羅攻略、新田義貞らによる鎌倉攻略へと時代は大きく転換していくのである。

注

- 1 武正 良浩 2003 「福音小学校構内遺跡II」－古墳時代以降編－ 松山市文化財調査報告書91
- 2 森 光晴・黒崎 直 1983 「国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」松山市文化財調査報告書17 松山市教育委員会（以降、松山市関係は発行機関等を一部省略）
- 3 橋本 雄一 2012 『齐明天皇の石湯行宮か』久米官衙遺跡群 シリーズ「遺跡を学ぶ」084 新泉社

第2章 星岡遺跡1次調査

第1節 調査に至る経緯とその後の経過

(1) 経緯

平成19年5月2日、市内福音寺町在住の仙波茂夫氏より、松山市星岡一丁目630番1における倉庫建設に伴う埋蔵文化財確認願(H19-31)が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「No116 川付遺物包蔵地」の一角に位置することから、旧財団の埋文センターによって同年5月14日に試掘確認調査が実施された。その結果、遺構と遺物が検出されたことから、開発に先立って事前の発掘調査が必要と判断された。これを受けて、仙波氏と市教委、埋文センターの3者は協議を行い、発掘調査は同年9月から10月までの1か月間の予定で実施することとなった。

発掘調査は9月10日に重機による掘削作業から着手した。

(2) 調査ならびに整理作業の経過

報告書の編集と刊行は、公益財団が松山市から受諾している指定管理業務の一環として、平成26年度に実施した。

以下、発掘調査と報告書刊行の経過を、作業日誌をもとに抄録の形で提示する。

日誌抄録

平成19年9月11日	現場作業初日。重機にて掘削作業を開始する。掘削は12日に終了。
13日	委託して基準点の打設に着手する。また、北部のT1とT2から遺構の確定作業を継続し、壁際の柱穴の掘り下げを行う。
20日	遺構の確定作業と平行して平板による測量と壁面の図化作業を継続する。
25日	各堅穴住居址群について調査を継続する。複数の住居址群の存在が判明。
26日	T3において遺構の確定作業を再開し、掘立001とSB005を認定する。
10月3日	SB005貼床上面で検出された弥生土器群の写真を撮影する。あわせて、T1とT2についても撮影し、終了後、柱穴の完掘作業に着手。
9日	調査最終日。全域で完掘後の柱穴について記録を補足し、撤収する。
11月	調査概要報告書を提出する。
平成20年7月19日	発掘調査速報展開幕。8月31日(日)まで、写真パネル等を展示する。
12月	『乍報20』刊行。1ページ掲載。
平成21年3月	出土遺物を埋文センターに仮収納する。
平成26年4月	市から本書の刊行を含む指定管理業務を受諾し、編集作業等を継続する。

- 5月2日 本書のレイアウトを決定する。
8月26日 遺物写真の撮影とレイアウトの作成を終了する。
11月10日 3次調査の原稿等を受領し、写真図版の編集に着手する。
平成27年1月30日 入稿。
平成27年3月17日 本書の納品を予定。3月末までに掲載遺物の収納を行う予定。

第2節 調査組織と調査方法

(1) 調査組織

平成19年度の発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体 財團法人松山市生涯学習振興財團

財團法人松山市生涯学習振興財團

	理 事 長	中村 時広
事 務 局	局 長	吉岡 一雄
総 務 課	課 長	石田 芳包
埋蔵文化財センター	所 長	丹生谷博一
	次 長	重松 幹雄
	次 長	田城 武志
(兼務)教育普及担当リーダー		重松 幹雄
(兼務)調査研究担当リーダー		田城 武志
(調査担当)主 任		橋本 雄一
(写真担当)調 査 員		大西 明子

(2) 測量基準

発掘調査に際して、業者に委託して基準点の配置を行った(第5図)。対象地内に世界測地系2000に基づく基準点を配置して測量の基準とした。基準点の打設は、市内来住町の有限会社四国測量設計に委託して、平成19年9月10日に実施した。

遺構の平面図を作成する際には、通常、4m程度のグリッドを設定して20分の1で図化しているが、調査区の形状が狭小で3か所に分断されているためこの方法を探らず、これらの基準点を利用して平板測量によって作成した。

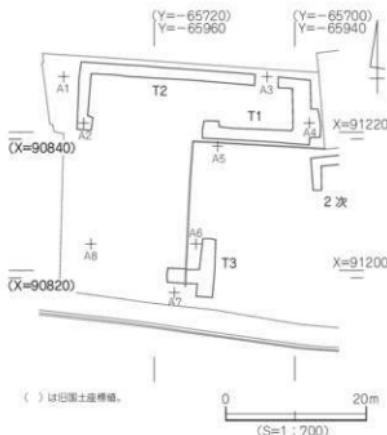
遺構や各トレンチの土層断面図については、通常通り20分の1で作成している。トレンチの土層断面図は、代表的な壁面を1ないし2面にしぶって、記録する形をとった。

なお、第5図に示すように、南部のT3の設定位置が、コンクリート基礎を超えて東側の星岡遺跡2次調査地側へはみ出した状態になっているが、実際の敷地境界はT3の東に位置している。掘削時に遺

構の損傷を避けるため、敷地内のコンクリート基礎を取り去らずに調査を行ったものである。

第5図に示す8か所の基準点の座標値は、以下の通りである。

A 1	X = 91228	Y = - 65973	Z = 28.473
A 2	X = 91221	Y = - 65970	Z = 27.938
A 3	X = 91228	Y = - 65944	Z = 28.474
A 4	X = 91221	Y = - 65938	Z = 28.053
A 5	X = 91218	Y = - 65951	Z = 28.521
A 6	X = 91204	Y = - 65954	Z = 28.496
A 7	X = 91197	Y = - 65957	Z = 28.107
A 8	X = 91204	Y = - 65969	Z = 28.516



第5図 1次調査の基準点

(3) 凡 例

- 1 本章における報告内容の一部は、「年報20」(平成20年刊行)と「第154集」(平成24年刊行)に掲載しているが、その内容に相違点がある場合、本書をもって訂正したものとする。
- 2 遺構の種別は略号で示した。堅穴住居: S B、掘立柱建物: 掘立、土坑: S K、溝: S D、柱穴: S Pなどである。
- 3 遺物の実測図は土器、石器ともに1/4で統一した。個別の遺構図は、1/100を基本とした。
- 4 基本土層の番号はローマ数字で、遺構埋土についてはアラビア数字等で表記した。
- 5 土色や遺物の色調の表記に際しては、「新版標準土色図」2003年版を参考にした。
- 6 本章にて使用した地形図は、以下の通りである。一部、加筆したものも含まれている。
松山市都市計画図1/500・同1/2500
- 7 出土遺物は報告書掲載番号を黄色で注記し、未掲載分は白色の番号が実測図番号に対応している。

第3節 調査成果の概要と層位

(1) 成果の概要

弥生時代後期から古墳時代、奈良時代ころにかけての遺構と遺物を多数検出した。主な遺構としては、竪穴住居址を少なくとも11棟、掘立柱建物3棟、土坑4基、溝2条、柱穴120余基などである。

弥生時代の遺構では、南部のT3で検出された方形のSB005が唯一の存在である。床面から後期後半ころの土器がまとまって出土した。古墳時代の遺構では、2か所で検出された竪穴住居址群のうち、T2西北部のものは古墳時代中ごろ以降のもので、周壁溝の様子から、最低でも4棟以上が重複していることが判明している。また、T3で検出された大型の円形柱穴で構成されている掘立001は、後期のかなり大型の建物とみられる。なお、T2東部で検出された掘立002と003は、平行の位置関係にあるものの、柱穴の形状や埋土の色調が異なることから、002は古墳時代後期以降、003は奈良時代以降のものではないかと考えている。

(2) 層位

T1、T2、T3の基本土層は、それぞれ第6図、第8図、第13図に示した。

調査地は、はじめ耕作地であったが、後にミカン畠として利用されている。旧耕作土層のうち、ミカン畠に造りかえられても現状で遺存しているのがⅡ層。I-a層は、Ⅱ層の上部に対して真砂やスクモ等を混ぜてミカン畠の土としたもの。I-b層は、調査着手前まで駐車場や資材置き場として利用されていた時に投入されたバラス。なお、Ⅱ層の土は水田耕作に伴うものではない。ミカン畠のころの地表面の標高は、28.2m付近とみられる。Ⅱ層の厚さは厚いところでも30cmを超えない程度で、これの直下で地山もしくは遺構の埋土が検出される。遺物包含層と呼べる上層は遺存していない。T2北壁西部で検出された13層(第8図)など、調査当初に包含層ではないかと考えた土層も僅かにあったが、これらの土層は、竪穴住居址群の埋土の一部であることが明らかになっている。

なお、調査記録中に地山に関する記述がみあたらないが、東に接する同2次調査時の記録を参考にして、橙色粘質土(75YR 6/6)としておく。これは、和泉砂岩の風化土と考えられている土である。

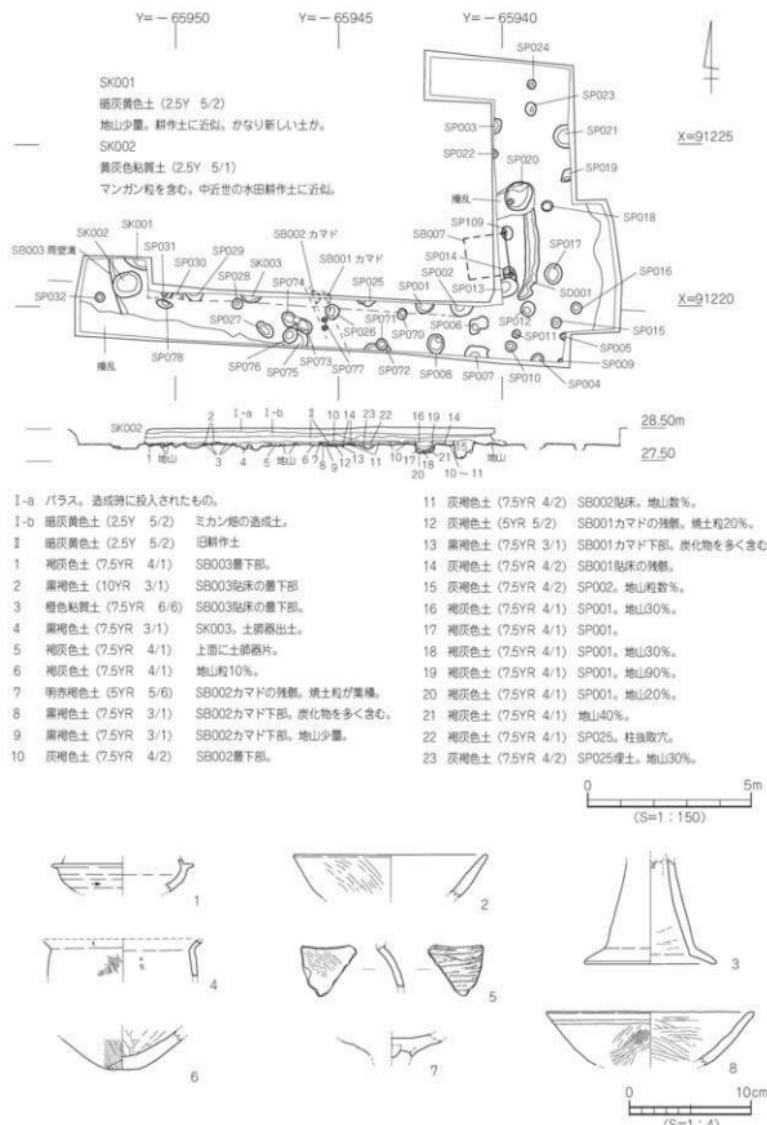
第4節 遺構と遺物

(1) T1の遺構と遺物

調査地東北部に位置するコの字状の調査区をT1と呼んでいる。東西約17m、南北約10m、幅約1.7m～約2.6m、東部は部分的に広げて4mほどの規模に設定した。西端の南壁沿いと東端の東壁沿いの2か所は現代の擾乱によって遺構は失われていた。

この調査区では、SB003が弥生時代後期後半以降のものと考えられる以外に弥生時代の遺構は確認

星岡遺跡 1 次調査



第6図 T 1 の遺構と遺物

されていない。S K001と002は中近世以降のもので、このほか、時代が判明した遺構の多くは古墳時代以降のものである。

堅穴住居址は少なくとも4棟を検出した。地山面に対する掘り込みが浅いため周壁溝の特定が部分的なことから、はっきりとは分からなかった。特に調査区中央部には2棟が斜めに重複しているらしく、壁際に設けられた造り付けカマドに伴う焼土の分布が、北壁の2か所で検出されている(図版2)。これら2棟の堅穴住居址は、カマド検出位置より東に立地するものと思われるが、東周壁溝や主柱穴を特定するには至らなかった。調査区西端で確認したS B003についても、西壁の位置は明瞭であるが東壁の位置は不明である。集落が立地した当時の地山面は、西に比べて東の方が若干高かったため、後世に耕作地となる際の削平や土壤化の影響を、住居址の東部の方がより大きく受けたことによるものと推測している。一方、東部で検出されたS B007の場合は、東周壁溝と考えられる幅広の溝S D001を伴っている。

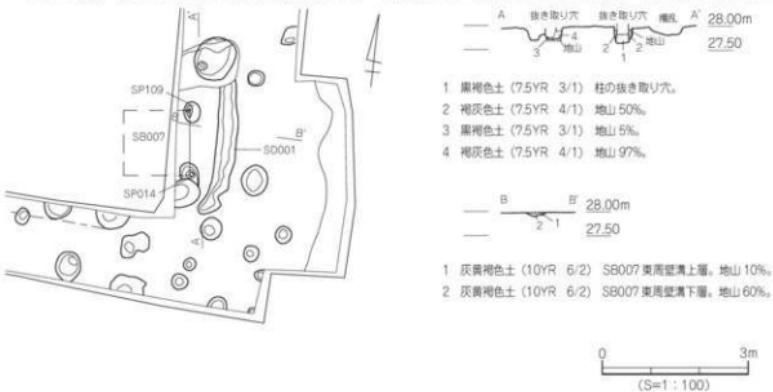
50基近い数の柱穴を検出しているが、掘立柱建物を認定するには至らなかった。東部のS P109と014の2基は、S B007の4本の主柱穴のうちの2本とみられる。

T 1 出土遺物[第6図]

1はS P020出土の須恵器壊身。欠けているため口径は不明であるが、90mm程度とみられる。2は土師器高杯の壊部。S B001のカマド近くから出土した。3は北壁中央西寄りで検出されたS K003出土の土師器高杯の脚部。脚端部の屈曲は短く、先端部が接地するのみである。4~7はいずれもS K003より西のT 1 西部から出土したもので、S B003の存在を反映した遺物ではないかと考えている。この住居の年代が弥生時代後期半を上限とするものであることを示しているのかもしれないが、耕作土直下の部分的に遺存した貼床の土からの出土であるので、詳細は不明。8は検出面からの出土である。

S B007 [第7図、図版2]

T 1 の東部で検出された堅穴住居址と考えている遺構である。S D001を周壁溝、S P109と014を主



第7図 S B007

柱穴の一部とみなしている。一辺長3.5～4m程度の小規模な方形の堅穴住居址と考えるが、詳細は不明である。2基の柱穴は深さ0.35mほど遺存しており、両柱穴とともに柱の抜き取り穴が確認されている。

出土遺物 図化可能なものは出土していない。

時期 方形であることから弥生時代後期後半以降と考えられるが、古墳時代後期の可能性が高いのではないかとみている。

(2) T 2 の遺構と遺物

調査地の北部から西北角に設定したトレーナーをT 2と呼ぶ。東西約25m、南北約10m、幅は1.5m～1.7mほどの規模である。第8図にその全容を示した。

T 2においては、弥生時代と断定できる遺構は確認できなかったが、調査区西北部の住居址群から一定量の弥生土器が出土していることから、付近に立地する可能性が高いとみられる(第10図)。出土遺物から年代がわかる遺構は、古墳時代中期から終末段階までに限られる(第10～12図)。

T 2西北部住居址群では、計5条の周壁溝なし住居址の掘りかたが検出されているが(第8図中の❶～❹)、相互の対応関係や個々の住居址の規模と形状については明らかになっていない。T 2東部で検出された2条の柱列は、ともに掘立柱建物に伴うものである。2棟が平行の位置に建てられており、北辺を検出したものであるのか、南辺を検出したものであるのかは不明である。北寄りの掘立002の柱穴は円形、南寄りの掘立003は方形で、柱穴埋土も異なることから、時期が異なる建物が重複しているものと判断している。調査区の西南角で検出された土坑(S K004)は、出土した土師器28の存在から、7世紀末ころのものとみられる。

掘立002 [第9図・図版3]

T 2東部で柱列を構成する柱穴4基を検出したもので、掘立柱建物の一部と考えているが、一本柱列である可能性もある。方位は真北で西に98°振っている。

東西方に直径約0.6m、深さ0.3～0.4mほどの円形の柱穴が、1.7～2.0mの間隔で配置されている。S P046とS P039の底には礎盤石が置かれている。すべての柱穴において柱の抜き取り穴を確認している。埋土は掘立003と比べると黒味の強いもので、相対的に古い時期の特徴を示す土である。

出土遺物 弥生土器の小片が出土したのみで、図化可能なものは出土していない。

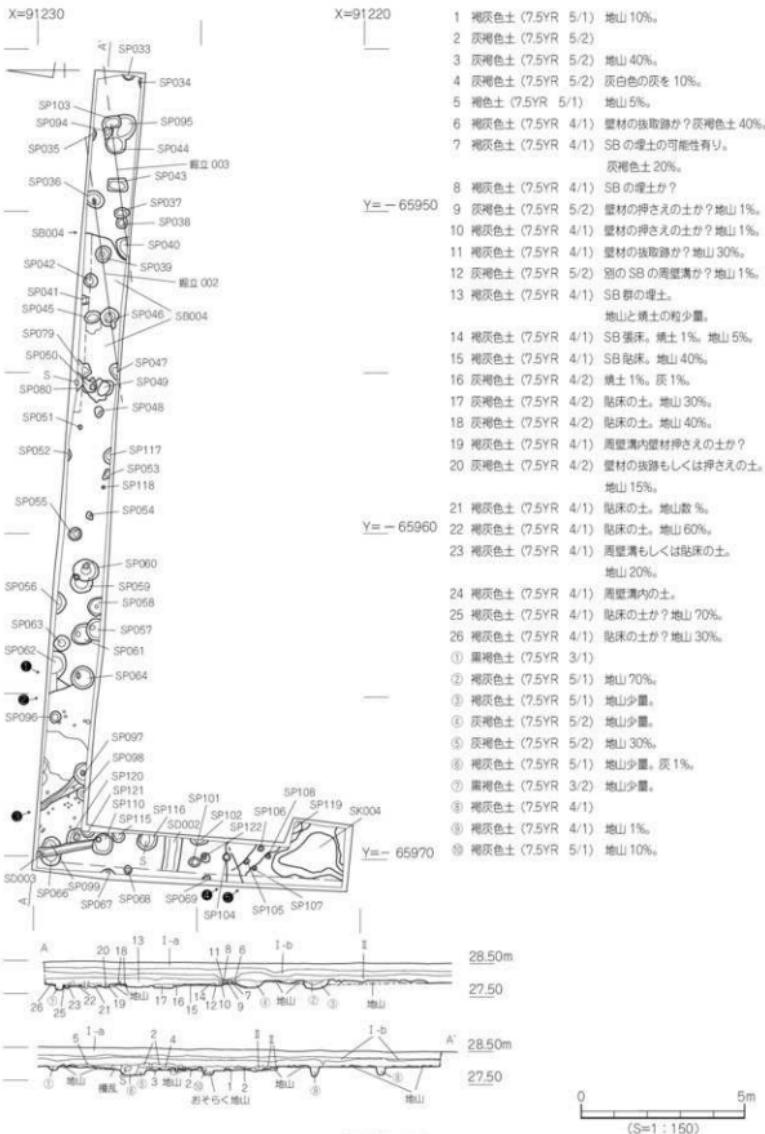
時期 円形柱穴で埋土の色調が黒いことから、掘立003と比べると相対的に古い時期の建物であることは確実である。6世紀後半よりも遅い可能性が高いと考えた。

掘立003 [第9図・図版3]

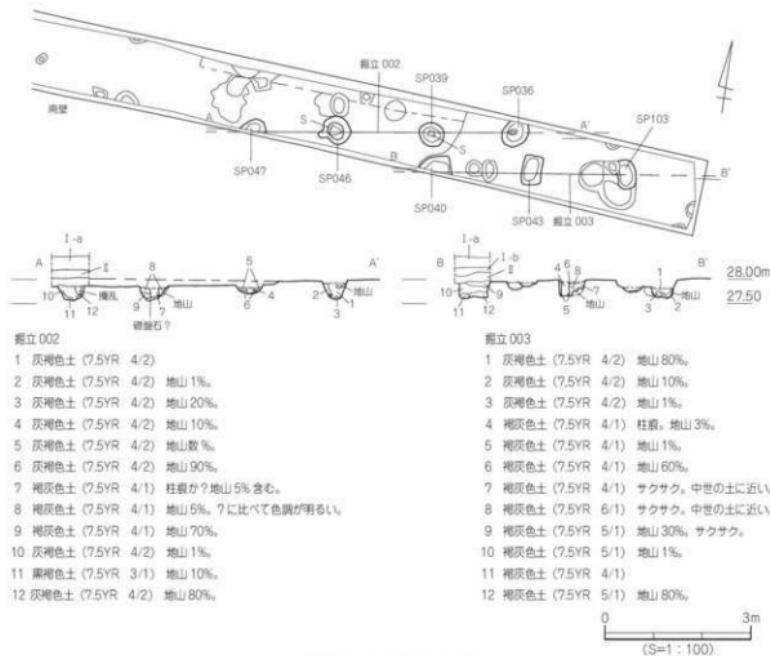
T 2東部で柱列を構成する柱穴3基を検出したもので、掘立柱建物の一部と考えているが、一本柱列である可能性もある。方位は、真北で西に97°振っている。

東西方に一辺約0.4～0.6m、深さ0.4mほどの長方形の柱穴が、2mほどの間隔で配置されている。S P043とS P103の2基は、南北方向に細長い長方形であるが、西寄りのS P040は、これらに比べて大型で正方形に近い形状に掘られている可能性がある。S P043とS P103の2基では断面観察の結果、柱

星岡遺跡 1 次調査



第8図 T 2



第9図 掘立002・003

の抜き取り穴を確認しているが、SP040では確認されなかった。埋土は掘立002と比べて色調の明るい新しい時期の特徴を示すものである。

出土遺物 SP040とSP043から須恵器の小片が出土しているが図化できるものではなかった。

時期 出土遺物から正確な時期を特定することはできないが、方形柱穴で構成されることと、埋土の色調が明るいことから、隣接する久米官衙遺跡群における成果を参考にして、奈良時代以降のものである可能性が高いと考えている。

T 2西北部住居址群[第10図]

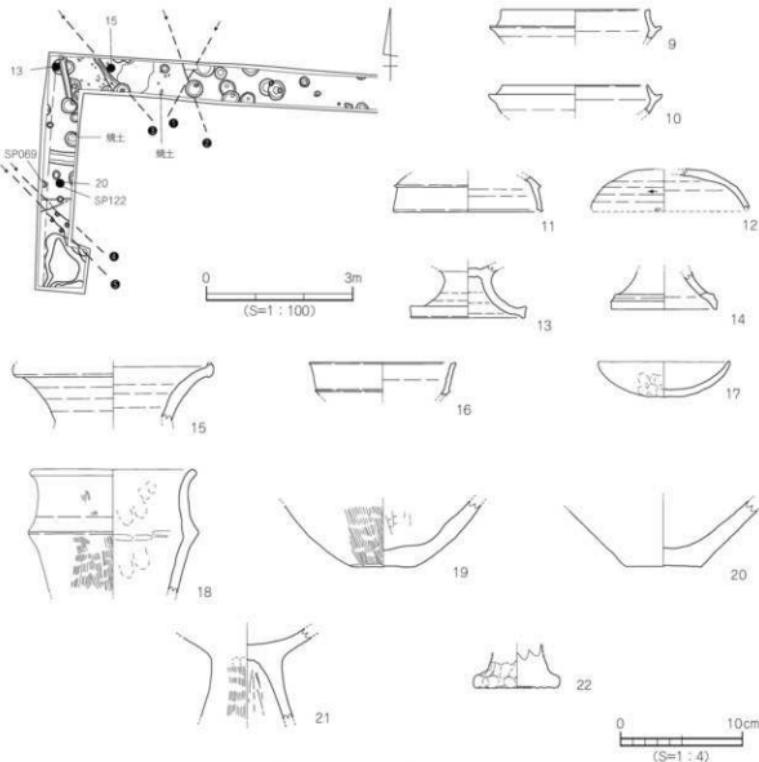
冒頭の概要でも述べたとおり、T 2西北角には複数の竪穴住居址が存在することは確実である。周壁溝ないし竪穴部に伴う段差が5条検出されているが、正確な棟数はわかつていない。調査区の北壁土層の観察結果によると、第8図の平面図中に示した①の段差より東には住居址の貼床や周壁溝に伴う土層は分布していないことから、この調査区に竪穴住居址が分布するのは西北角周辺に限られるものと考えている。

T 2西北部住居址群において、まとまった数の比較的大型の円形柱穴を検出しているが、住居址に伴うものであるのか、あるいは掘立柱建物など別の造構に伴うものなのか区別することはできなかった。

調査区中央部のS P054より西の柱穴43基中、土器片を出土した柱穴は26基あって、そのうちの15基から須恵器が出土している。2棟の古墳時代後期以降の掘立柱建物が立地する調査区東部と比べても、須恵器が出土する率が高いことから、西北部で検出された中小の柱穴の多くは古墳時代中期以降の何らかの建物に伴うものである可能性が高いものと評価している。

出土遺物 第10図の9～16は須恵器、17は土師器、18～22は弥生土器である。9と11～16は住居址群の埋土中、17と19、21、22はサブトレンチ中から出土している。貼床の土から出土したことが明らかな遺物は10と18の2点のみである。9と比較して新しい形態の10が貼床の上部から出土している。13は短脚の高環の脚部で、灰白色に焼成されている。

時期 弥生土器は後期後半のもので占められることから、これ以降の時期の方形堅穴住居址であると考えられる。須恵器の古いところでは、9、11、14などの存在から、5世紀末以降の時期を想定可能である。最も新しい13は7世紀前半まで時期が下る。弥生後期の土器の出土状況に規則性は認められなかったことから混入品とみて、6世紀とその前後に展開した住居址群と考えている。



第10図 T2西北部住居址群

SK004 [第11図]

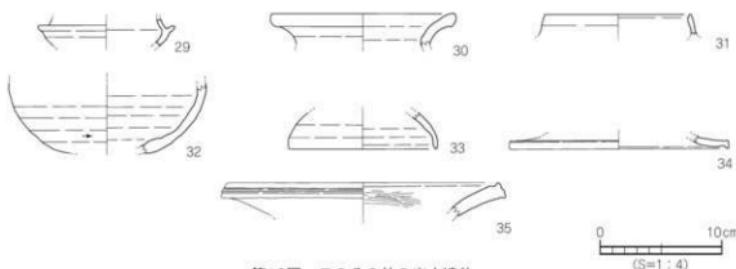
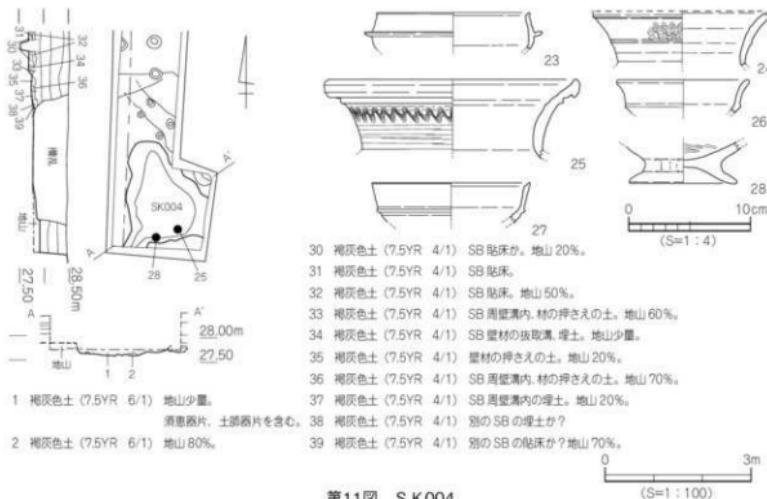
T 2 西南端に位置する不整形な土坑。T 2 西北部住居址群の一部(①と⑤)と重複する。西南角と東南角に溝状の造構が連結するようにも見える。南北約2.1m、東西約1.6m、地山面からの深さは最大で0.3mほど。土色は褐灰色土でもかなり明るい色調で、古墳時代よりも確実に新しい時代の特徴を示す。

出土遺物 23~27は須恵器、28は土師器。須恵器はすべて堅穴住居からの混入品とみる。28の土師器は、碗もしくは大型の壺の底部と考える。脚部と壺部の境は、指押さえによって仕上げられている。壺部(底)内面は磨きによって仕上げられており、器全体が赤みの強い色調に焼き上げられている。

時期 28の細かな年代はわからないが、おそらく7世紀末を上限とするものと判断している。

その他の出土遺物[第12図]

29~33は須恵器、34は土師器、35は弥生土器。33はS P066、34はS P120、35はS P068出土。



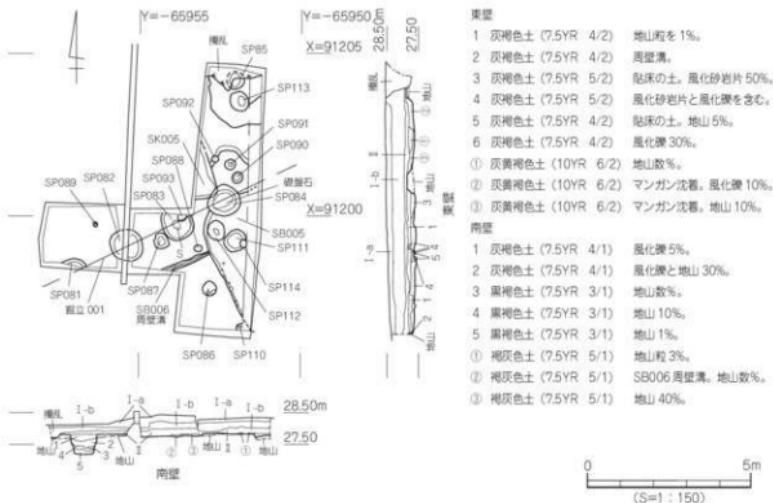
(3) T 3 の遺構と遺物

調査地南部に離れて設定した調査区をT 3と呼ぶ。第13図にその全容を示した。

東西約7m、南北約8.4m、幅2.1~2.5m程度のT字に近い形状の調査区である。調査区はコンクリート製の擁壁によって、東西に2分されている。北端には擾乱による遺構面の破壊が認められるほか、調査区西端の壁面には試掘時のトレンチが一部重複している。

方形の竪穴住居址を部分的に2棟、掘立柱建物1棟のほかに10基余りの柱穴を検出した。このうち、SB006は周壁溝1条を検出したもので、削平を受けているため実態は明確でない。南壁西部の地山面上直上に貼床や周壁溝に伴うと考えられる土層が僅かに遺存していることから、住居址はこの周壁溝よりも北側に展開するものと想定している。調査区東南部で検出されたSB005より先行する可能性もあるが、両者の関係はよくわかつていない。SB005は弥生時代後期の方形竪穴住居址の西北角を検出したもので、貼床の上面からまとまった量の弥生土器が出土している(第16・17図)。

大型の円形柱穴4基で構成される掘立001は、前述の竪穴住居址よりも新しい時代のものである。西の2基は一部しか調査できなかったが、東の2基については、礎盤石が置かれており、一部、柱の痕跡も確認されている。出土遺物から正確な時期を推定することは困難であるが、SB005と比較してかなり色調の黒い埋土であることから、古墳時代前期以降のものであることは間違いないと考えている。南に隣接する星岡登立遺跡1次調査地(第3図)において、これとよく似た方位の大型の掘立柱建物が見つかっていることから、かなり有力な集落の一角に位置するのではないかと考える。



第13図 T 3

掘立001 [第14図、図版4]

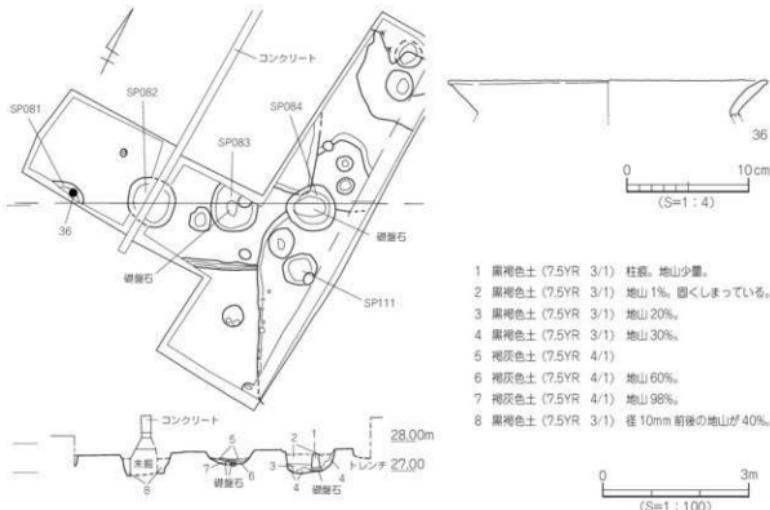
T 3 の中央で検出された 4 基の円形柱穴を、掘立柱建物の側柱列の一部と考えている。最低でも東西 4 間以上、おそらくは 5 間以上の比較的大きな建物と考えられる。

最も東の S P084 と、コンクリート擁壁と重複する S P082 の間の推定柱間距離は約 3.5m である。この柱列が建物の桁行にあたると仮定すると、5 間で約 8.75m に達することになる。方位は真北で西に 114° 振っている。

各柱穴の直径は 1 ~ 1.1m、深さは 0.3 ~ 0.5m 程度である。唯一、柱穴の全形を検出することができた S P084 は、S B005 の堅穴部や付近の浅い掘り込みに対して後出する。この柱穴と S P083 の 2 か所で、底に礎盤石が置かれていた。S P084 では、礎盤石に接して直径 150 ~ 180mm 程度の柱痕もしくは柱の抜き取り穴が確認されている。柱穴埋土の土色は黒褐色ないし褐灰色で、先に T 2 で報告した掘立003などと比較すると明らかに黒味の強い色調である。

出土遺物 36 は S P081 出土の弥生土器の口縁部の小片である。付近の堅穴住居址に伴う遺物が混入したものと考えている。

時期 出土遺物から時期を特定することはできないが、古墳時代の建物であることは間違いない。大型の円形柱穴で構成され埋土の土色が黒い特徴は、隣接する久米官衙遺跡群においては 6 世紀中葉ないし後半よりも古い時期の建物で認められるものである。方位が大幅に西に振れる点については、地形との関係もあって直接の決め手にはならないと考えるが、すぐ北東に隣接する福音小学校構内遺跡の集落の建物方位とも異なることから、古墳時代中期を中心とする時期のものでもないのかもしれない。



第14図 掘立001

SB005 [第15～17図、図版4・5]

T3の東南部で検出された方形の堅穴住居址である。西北角付近を部分的に検出したのみであることから全体規模は不明であるが、調査区東壁の南端で壁に由来する土層(第15図の2層)を確認したことから、最低でも南北規模を4.5m超と推定している。西北角の形状からすると、方形とは言っても四隅が丸みを帯びた隅丸方形の堅穴部である。

この住居址に伴う柱穴は特定されていない。SP111が4主柱構造の柱穴のひとつである可能性は十分にあると考えるが、断定するには至らなかった。

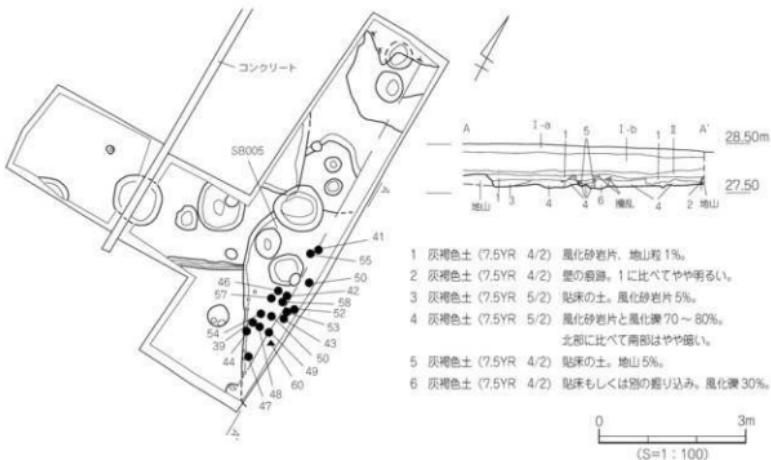
堅穴部の下部には厚いところで15cm程度の貼床の土層が認められたが、明確に周壁溝と呼べる構造は確認されなかった。調査区東壁の南端で、この住居址の壁の痕跡と考えられる土層(2層)を確認している。貼床の4層で押さえることによって壁の根元を固定したものと考えられる。

貼床上面ないし一部貼床中から弥生土器がまとめて出土している(図版4)。図化可能な個体の多くは調査区東壁のトレンチ沿いに集中しており、堅穴部西北角近くでは小片しか出土していない。多くの土器が壁沿いのトレンチ中から出土したため、それぞれの個体の正確な出土位置を復元することが困難な状況にあるが、明確に判明しているものに限って第15図に図示した。

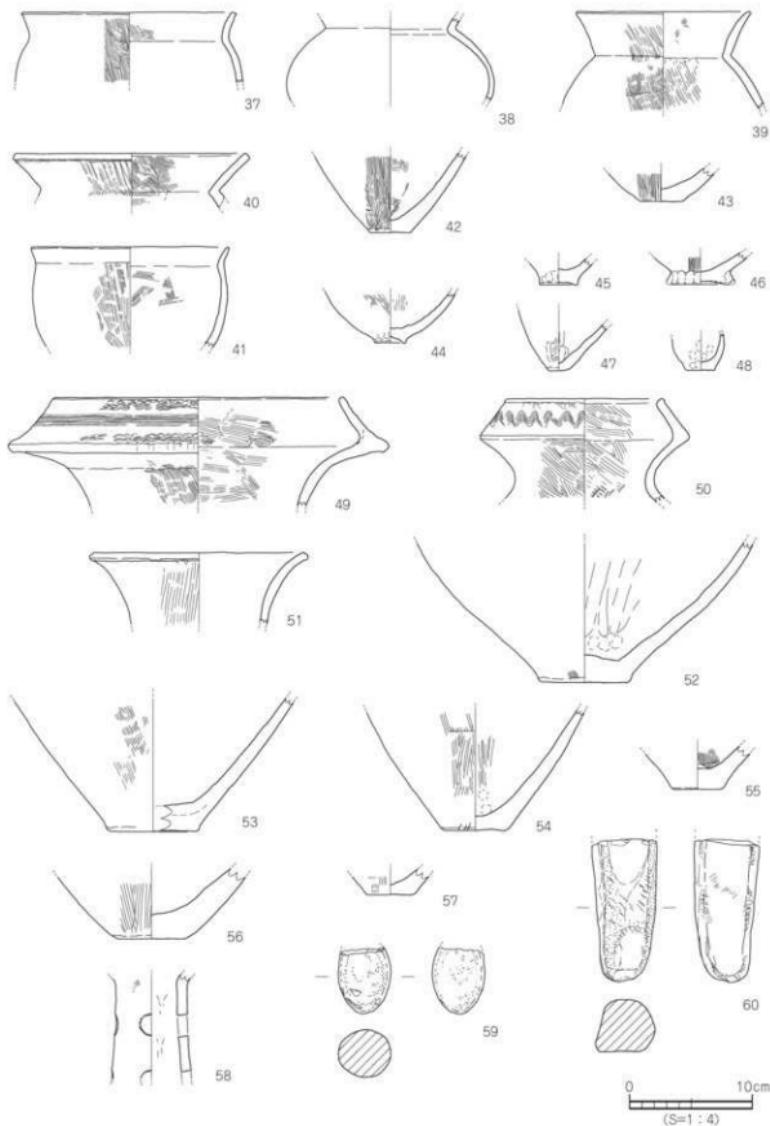
出土遺物 37～58はすべて弥生土器である。土師器は含まれていない。59と60は石器である可能性が想定されるものである。

第16図掲載の遺物の中で貼床の上面から出土したことが明確なものは、37、38、40、51、56の5点。45と59の2点は貼床中から出土したものである。このほかのものは、堅穴部の埋土である1層から出土している。また、第17図の9点は、調査区東壁沿いに土層観察用のサブトレンチを設定し掘り下げを行った際に取り上げたもので、正確な出土状況の記録が無いものである。

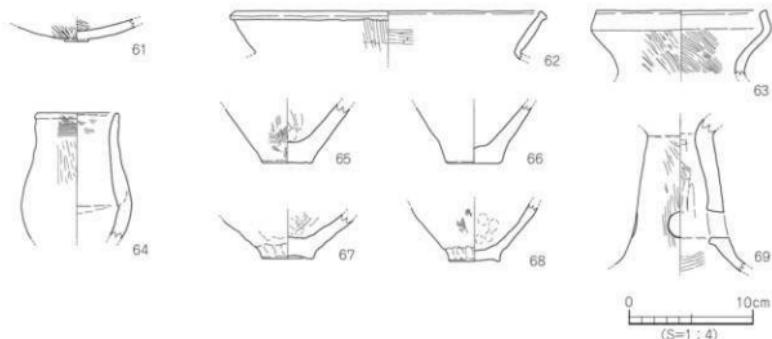
37～47は、壺もしくは鉢、あるいはそれらの底部と考えられる個体である。いずれの個体も内外面に



第15図 SB005



第16図 S B005出土遺物



第17図 T3東トレンチ出土遺物

刷毛目調整の痕跡が密に残されているが、叩き調整が施されたものは無い。40の外表面は粗い刷毛目であるが、内面の刷毛目は細かく磨きに近い仕上がりになっている。底部は小型のものが多く、47は尖底に近い形状である。48は手捏ねによるミニチュア。49～57は盃。刷毛目調整は粗いものが多い。51～53は多くの白色の砂粒を胎土中に含んでおり、その状況は壺の胎土とは異なっている。58は円形の透かし孔が4方向に施された大型の高環の軸部。69の円孔は1段であるが4方向のようである。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半ころのものと考えている。

第5節 まとめ

狭小な調査区での発掘調査ではあったが、古墳時代後期を中心とする時期の集落を高い密度で検出できたことは成果のひとつであった。隣接する福音寺遺跡筋延地区や星ノ岡遺跡旗立地区（第3図）で確認されている集落域が、南あるいは西へ広がり、50mほど南に位置する星岡登立遺跡1次調査地付近にまで達していることが確実となった。その領域は、第3図に示す標高27mの等高線付近を南限とする。この27mの等高線は調査地の南北約80mの地点で北へ曲がっているが、試掘調査の結果、遺跡の広がりが確認される範囲はこれの東に限られている。南北の市道（第3図左端）を挟んだ西側でこれまでに知られている遺跡は星岡登立遺跡2次調査地の1か所のみで、時期も異なり中近世が中心であった。

かつて星岡遺跡1次調査とこの登立2次について『第154集』で報告した際に、国道11号沿いに立地する泉（第3図）の存在に着目したことがあるが、この泉は、標高27mの等高線が東に入り込んだ谷状の地形の先に位置している。標高28mの等高線が国道の北側へ超えるあたりが谷地形の一一番奥にあたっており、乃万の裏遺跡2次調査地のような湧水の多い地点が、この泉周辺に立地しているのである。

第2図や第3図から、当該地付近は近世の旧石井村の東北角が旧久米村西南部にくい込んだ形で張り出した形になっていることがわかるが、これは、標高が高く水の便が悪い旧石井村東北部の水源として、泉周辺の土地を取り込んだ結果とも考えられる。この微地形と泉の存在は、付近の土地開発の歴史と集落のあり方に影響を与えていると推測されるのである。

第3章 星岡遺跡3次調査

第1節 調査に至る経緯とその後の経過

(1) 経緯

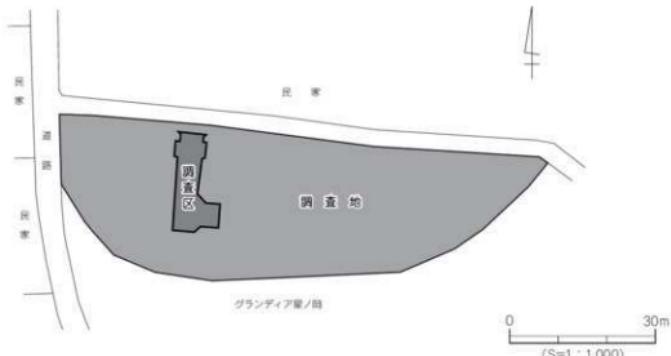
平成22年(2010年)6月、有限会社道後村代表取締役 近藤千鶴子(以下、「申請者」という。)より、松山市星岡一丁目602番1地内における宅地造成にあたり、埋蔵文化財確認願が市教委に提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「No116 川付遺物包含地」の一角に位置することから、同年9月27日と28日に試掘確認調査が実施された。

試掘調査は新財團の埋文センターが実施した。その結果、遺構と遺物が確認されたことから、開発に先立って事前の発掘調査が必要と判断された。この結果を受けて、埋文センターと申請者の間で協議がおこなわれ、記録保存のための発掘調査をおこなうこととなった。

調査区は県からの通知に基づき、宅地造成工事に伴って遺構の保護が困難と判断された敷地中央西寄りに限定して実施することとなった。対象面積は約138m²であった。調査は新財團の埋文センターが主体となって、平成22年12月1日より開始した。

(2) 調査ならびに整理作業の経過

出土遺物等整理及び報告書編集、刊行の各事業は松山市の指定管理業務の一環として実施した。一連の作業は、平成26年度に公益財団が受諾して埋文センターにて実施した。



第18図 調査地の位置

以下、発掘調査と報告書刊行の各事業の経過を、作業日誌をもとに抄録の形で提示する。

日誌抄録

平成22年12月1日	現場作業初日。2日まで重機にて掘削作業を開始する。
15日	遺構検出作業を終了する。
22日	掘立1の柱穴を半裁し、土層断面等の記録をとる。
平成23年1月5日	掘立柱建物の調査を継続する。
7日	写真撮影の後、器材を撤収して屋外作業を終了する。
3月	調査概要報告書を提出する。
7月21日	発掘調査速報展開幕。写真パネル等を展示する。
平成24年11月	『年報24』刊行。
平成26年4月	市から本書の刊行を含む指定管理業務を受諾し、編集作業等を継続する。デジタルトレース等の作業を継続。
5月2日	本書の構成を検討し、方向性を決める。
8月26日	遺物写真の撮影とレイアウトの作成を終了する。
11月10日	3次調査の原稿等を受領し、写真図版の編集に着手する。
平成27年1月30日	入稿。
平成27年3月17日	本書の納品を予定。3月末までに掲載遺物の収納を行う予定。

第2節 調査組織と調査方法

(1) 調査組織

平成22年度の発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体 財團法人松山市文化・スポーツ振興財團

財團法人松山市文化・スポーツ振興財團

理 事 長	一色 哲昭
事 務 局	局 長 松澤 史夫
	次 長 近藤 正
施設利用推進部	部 長 中越 敏彰
埋蔵文化財センター	所 長 田城 武志
(兼務)調査研究担当リーダー	栗田 茂敏
(調査担当)調査員	水本 完児
(写真担当)調査員	大西 明子

(2)測量基準

発掘調査に際して、業者に委託して基準点の配置を行った。対象地内に世界測地系2000に基づく基準点を配置して測量の基準とした。

調査にあたり、調査区を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA、B、C、…E、西から東へ1、2、3とし、A 1、A 2、A 3、…E 3といったグリッド名を付した(第19図)。なお、グリッドは検出した遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

(3)凡例

- 1 本章における報告内容の一部は、「年報23」(平成23年刊行)に掲載しているが、その内容に相違点がある場合、本書をもって訂正したものとする。
- 2 遺構の種別は略号で示した。掘立柱建物:掘立、土坑:SK、溝:SD、柱穴:SP、などである。
- 3 遺物の実測図は土器と石器は1/4を基本としたが、一部、1/3と2/3のものが含まれる。個別の遺構図は1/20～1/30を基本とした。
- 4 基本土層の番号はローマ数字で、遺構埋土についてはアラビア数字等で表記した。
- 5 土色や遺物の色調の表記に際しては、「新版標準土色帖」2003年版を参考にした。
- 6 出土遺物は報告書掲載番号を黄色で注記し、未掲載分は白色の番号が実測図番号に対応している。



第3節 調査成果

(1) 成果の概要

市道を挟んで星岡遺跡1次調査地のすぐ南側の敷地において発掘調査を行った結果、6世紀代と平安時代後半ころと考えられる掘立柱建物の一部を検出した。擾乱によって遺構面が破壊されている場所が多かったものの、特に、掘立2において得られた成果は重要である。柱穴から古瀬戸の花瓶と宋銭各1点が出土したことから、付近の建物の中に11～12世紀ころのものが含まれることが明らかになった。当該期の建物で、出土遺物から具体的な年代がわかる稀な事例である。

このほかに、溝1条と柱穴100基余りを検出しているが、多くは中世のものと考えている。

検出された遺構の中に明確に弥生時代と断定可能なものは含まれていなかったが、全体の傾向としては、北隣の同1次やその東の同2次における成果とほぼ同一時期の遺構や遺物によって占められている。

(2) 層位

調査地は、星岡丘陵北方の標高27.8～27.9mに位置する。調査で確認した土層は、以下の5層である。なお、調査地内には建物基礎や近現代の造成に伴う擾乱坑が調査対象範囲の約3分の1を占めており、調査地南部では部分的に遺構が残存する程度の状況であった。

検出遺構や出土遺物より、第IV層は古代までに堆積した土層と考えられる。

第I層：近現代の開発に伴う造成土で、地表下1.3m以上に及ぶ開発が行われている。

第II層：水田耕作に伴う耕土で、層厚5～35cmを測る。明緑灰色土(5YR 7/2)で、擾乱を除き調査区のほぼ全域に分布している。

第III層：浅黄橙色土(10YR 8/4)で、調査区のほぼ全域に分布し、層厚5～20cmを測る。

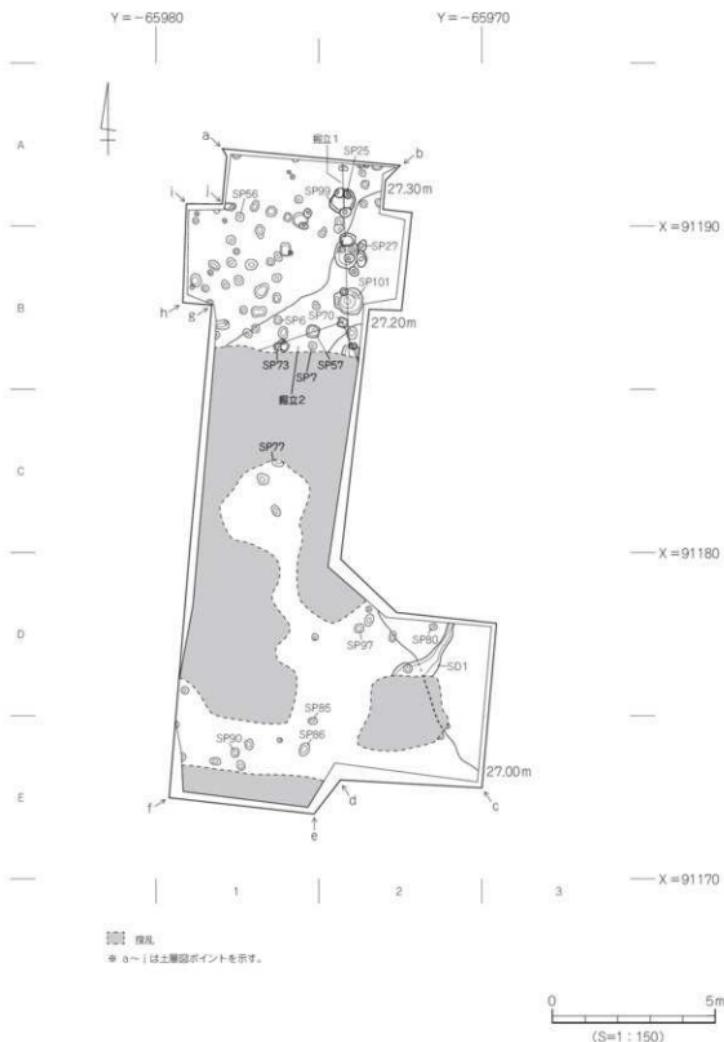
第IV層：褐灰色土(7.5YR 6/1)に暗褐色土(7.5YR 3/4)がブロック状に混入するもので調査区北西部を除く地域に分布し、層厚3～28cmを測る。本層上面にて柱穴を検出した。

第V層：土色の違いにより、2層に分層される。いわゆる地山層である。

V①層：黄橙色土(7.5YR 7/8)で、調査区全域に分布し、最大層厚50cm以上を測る。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。なお、本層上面の標高を測量すると、調査区北東部が最も高く、海拔標高27.4mを測り、南西側に向けて傾斜をなし、調査区南西部では標高26.9mを測る。

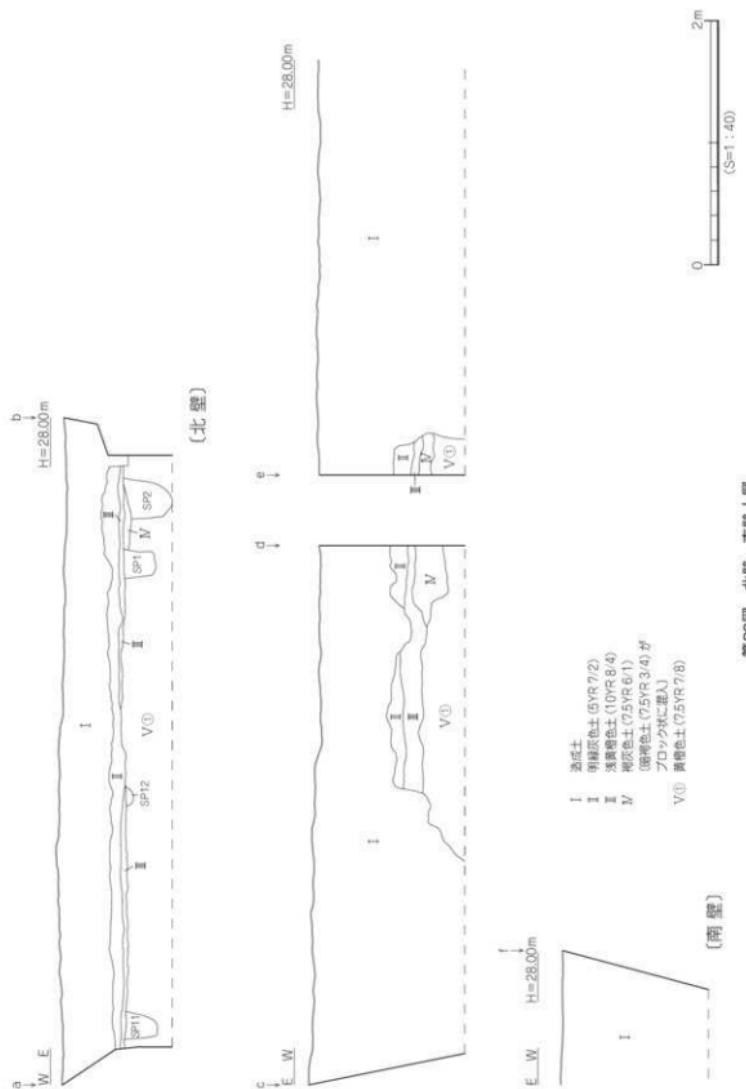
V②層：明黄褐色土(25Y 7/6)で、調査区中央部西南寄りの地点、地表下1.4mに分布する。

星岡遺跡 3 次調査



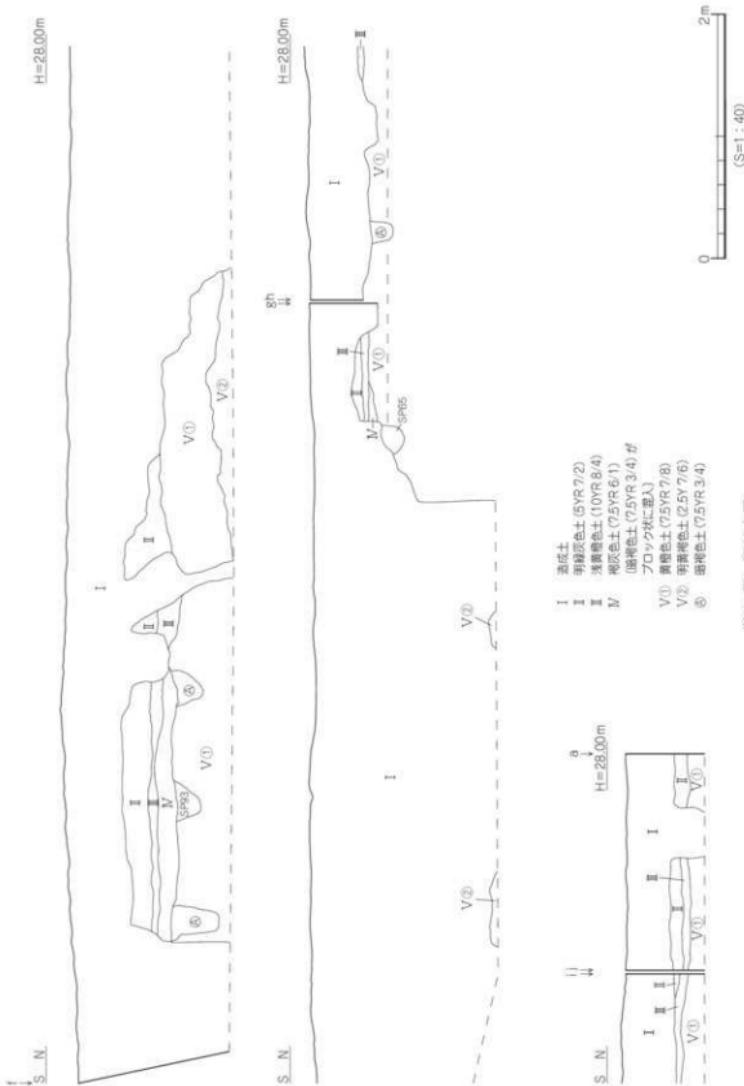
第19図 造構の配置

星岡遺跡3次調査



第20図 北壁・南壁土層

星岡遺跡 3 次調査



第21図 西畠土層

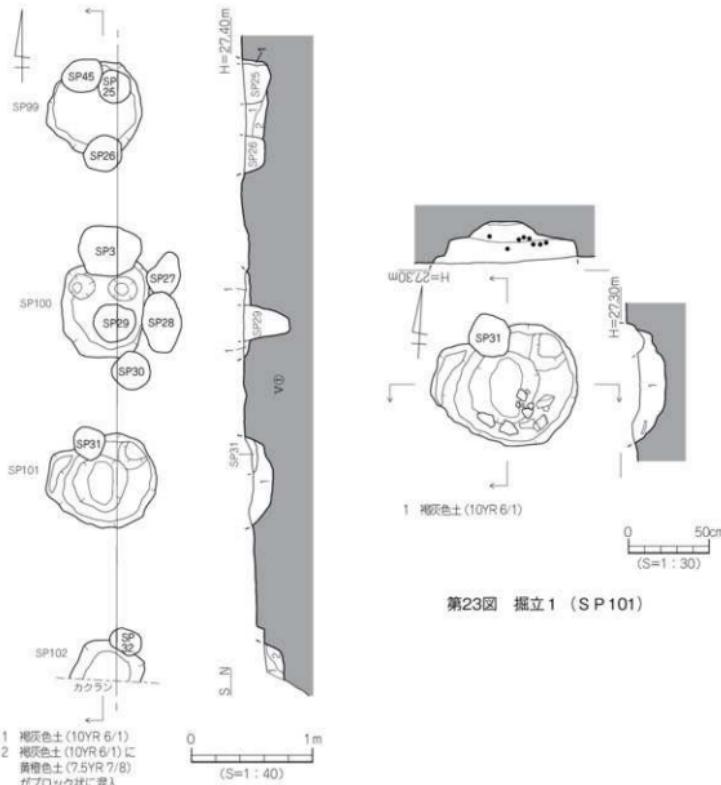
第4節 遺構と遺物

本調査では、弥生時代から中世の遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、掘立柱建物2棟、溝1条、柱穴101基(掘立柱建物柱穴8基を含む)である。ここでは遺構別に説明する。

(1) 掘立柱建物

掘立1 [第22~24図、図版8・9]

調査区東北部A2、B2区に位置する建物址で、第V①層上面で検出した。第IV層が覆う。南北3間以上上の掘立柱建物址で、4基の柱穴(S P99~102)を検出した。建物規模は、検出長4.50m、柱穴間隔は1.4



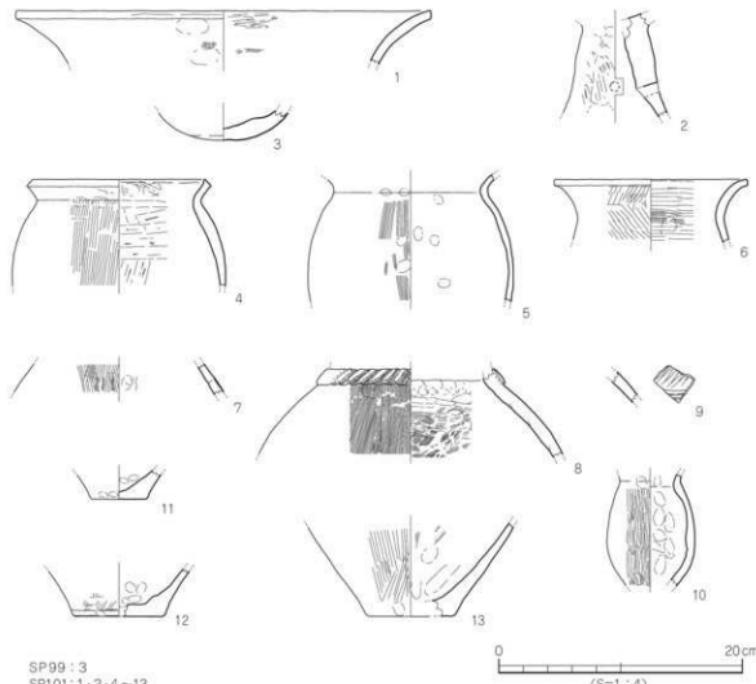
第22図 掘立1

第23図 掘立1 (S P 101)

~1.6mである。建物を構成する柱穴の平面形態は円形で、掘り方規模は径42~82cm、深さは6~22cmである。柱穴掘り方埋土は褐灰色土(10Y R 6/1)を基調とし、2基の柱穴(S P99、102)は下部に黄橙色土(7.5Y R 7/8)が混入している。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土した。なお、S P101からは土器片がまとめて出土している。

出土遺物 3はS P99、その他はS P101出土品。1と2は土師器。1は壺形土器の口縁部。外反口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。2は高坏形土器の脚部。柱部下位に径0.6cm大の円孔を穿つ。外面には、タテ方向のヘラミガキ調整を施す。3は須恵器壺。底部の完存品で、外面には回転ヘラケズリ調整を施す。4~13は弥生土器。4と5は壺形土器。4は「く」の字状口縁で、口縁端部を上方に拡張する。胴部外面にはハケメ調整、内面はヨコないしタテ方向の板状工具によるナデを施す。6~9は壺形土器。6は太頸壺で、口縁部は短く外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。7~9は肩部片。7はヘラ状工具による刻目、9はヨコ方向の沈線文を施す。8は頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。10は鉢形土器。長胴で外面には丁寧なヘラミガキを施す。11は壺形土器、12と13は壺形土器の底部片で、平底である。

時 期 土師器や須恵器の特徴より古墳時代後期、6世紀代の建物と考えられる。



第24図 挖立1出土遺物

掘立2〔第8・9図、図版8・12〕

調査区北部B1、B2区に位置する建物址で、第V①層上面での検出である。東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物址で、4基の柱穴(S P32、57、70、76)を検出した。建物方位は、N-120°-Wである。なお、S P76は暗褐色土で、黄橙色土がブロック状に混入するS P73に一部削平されている。建物規模は、東西検出長1.92m、南北検出長0.77mである。建物を構成する柱穴の平面形態は不整方形で、掘り方規模は径22~40cm、深さは検出面下16~38cmである。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土(7.5YR 6/1)に暗褐色土(7.5YR 3/4)がブロック状に混入するものである。柱痕は3基の柱穴(S P57、70、76)で検出され、規模は径10~13cm、深さ25~48cmである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器片のはかにS P70からは古瀬戸の花瓶(14)が出土した。花瓶には打ち欠いた痕跡が認められることから、柱穴祭祀が執り行われたものと推測される。なお、S P57からは中国鏡(15)が出土した。

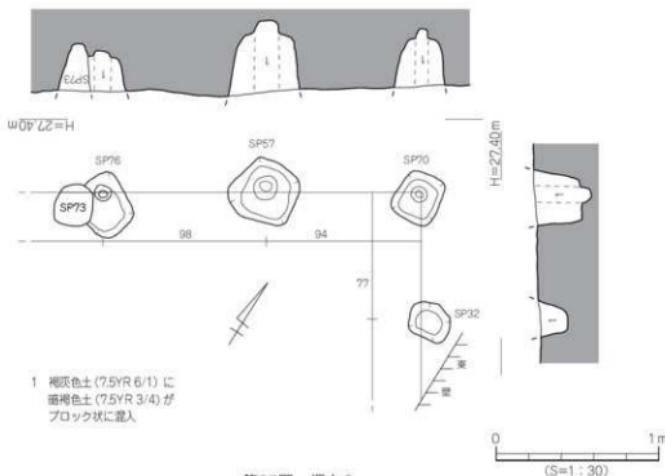
出土遺物 14は古瀬戸の花瓶で、口縁部や底部は欠損している。胎土は灰白色で外面には薄緑色の釉薬が全面にかけられているが、内面は部分的である。15は北宋・第4代皇帝仁宗の時代、西暦1039年初鑄の皇宋通寶である。完形品で、直径2.45cm、孔寸0.7cm、外縁厚0.1cm、内側厚0.08cm、重量1.741gである。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代後期の建物と考えられる。

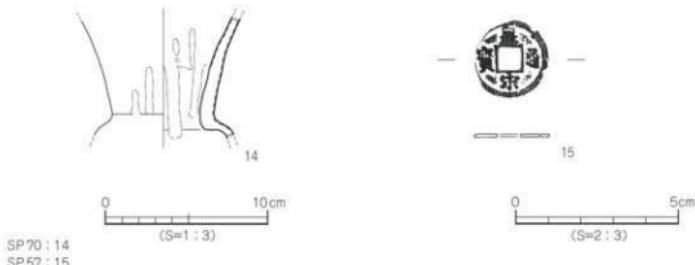
(2)溝

SD1〔第27図、図版10〕

調査区東南部D2区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東北端は調査区外へ続く。第V①層上面での検出である。規模は検出長2.20m、幅0.11~0.60m、深さは検出面下5cmである。溝の底は、北から南に向けて傾斜をなす(比高差9cm)。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 6/1)に灰褐



第25図 掘立2



第26図 挖立2出土遺物

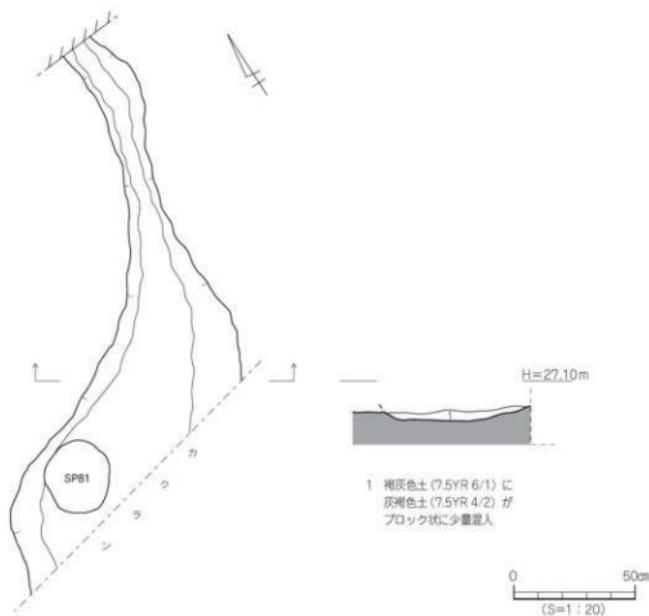
色土(7.5Y R 4/2)がブロック状に少量混入するものである。溝内から遺物は出土しなかった。

時 期 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、同様の埋土の柱穴内から中世の土器片が出土していることから、概ね中世の遺構と考えられる。

(3)柱 穴

調査では、101基の柱穴を検出した(第28～34図、図版8、S P72は欠番)。このうち、8基の柱穴は掘立柱建物を構成する柱穴である。検出した柱穴の掘り方埋土は、以下の8種類に分けられる。なお、掘立1を構成する柱穴(S P99～102)は5類と6類、掘立2(S P32、57、70、76)は4類の柱穴により構成されている。

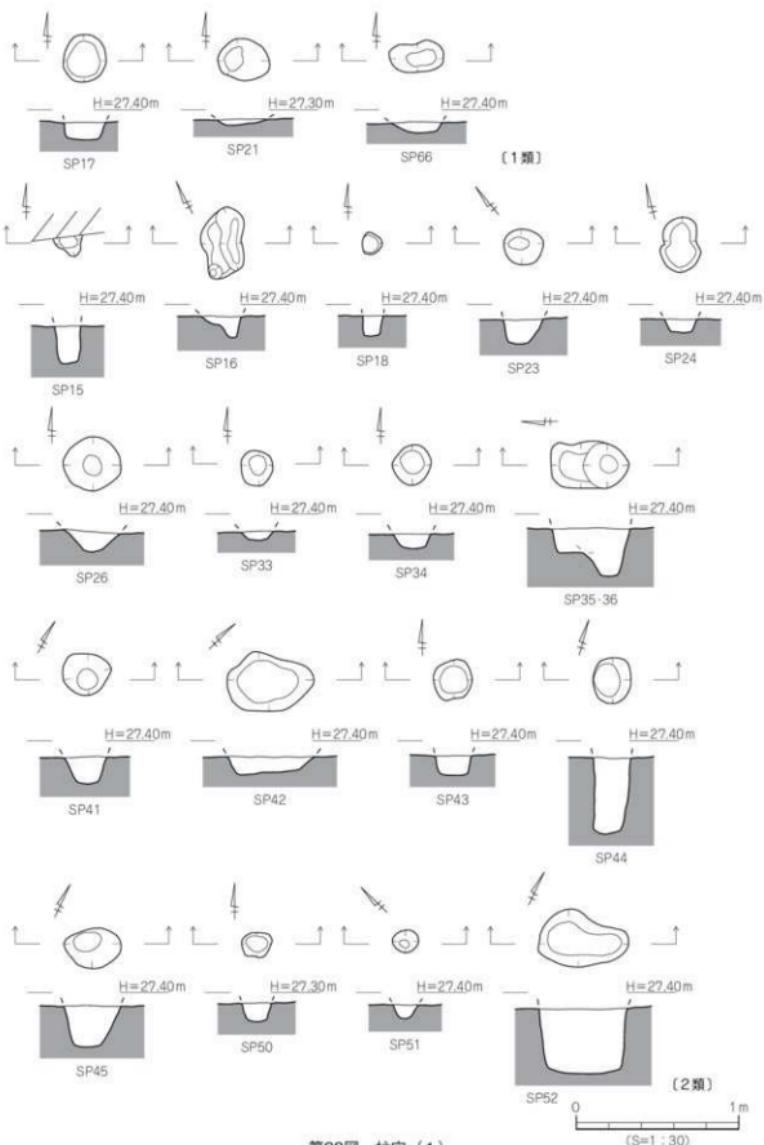
- 1類－灰白色土(7.5Y R 6/1)：3基(S P17、21、66)
- 2類－灰色土(7.5Y R 7/1)：33基(S P15、16、18、23、24、26、33、34、35、36、41、42、43、44、45、50、51、52、53、54、59、60、61、62、69、71、81、87、88、89、95、96、98)
- 3類－灰褐色土(7.5Y R 3/4)：8基(S P4、10、11、63、68、79、80、90)
- 4類－褐灰色土(7.5Y R 6/1)に暗褐色土(7.5Y R 3/4)がブロック状に混入：8基(S P12、14、20、32、57、58、70、76)
- 5類－褐灰色土(10Y R 6/1)：4基(S P5、78、100、101)
- 6類－褐灰色土(10Y R 6/1)に黄橙色土(7.5Y R 7/8)がブロック状に混入：4基(S P1、77、99、102)
- 7類－暗褐色土(7.5Y R 3/4)に黄橙色土(7.5Y R 7/8)がブロック状に混入：20基(S P2、3、19、28、29、37、38、46、47、55、56、64、65、73、74、82、83、91、92、93)
- 8類－黒褐色土(2.5Y 2/3)：21基(S P6、7、8、9、13、22、25、27、30、31、39、40、48、49、67、75、84、85、86、94、97)



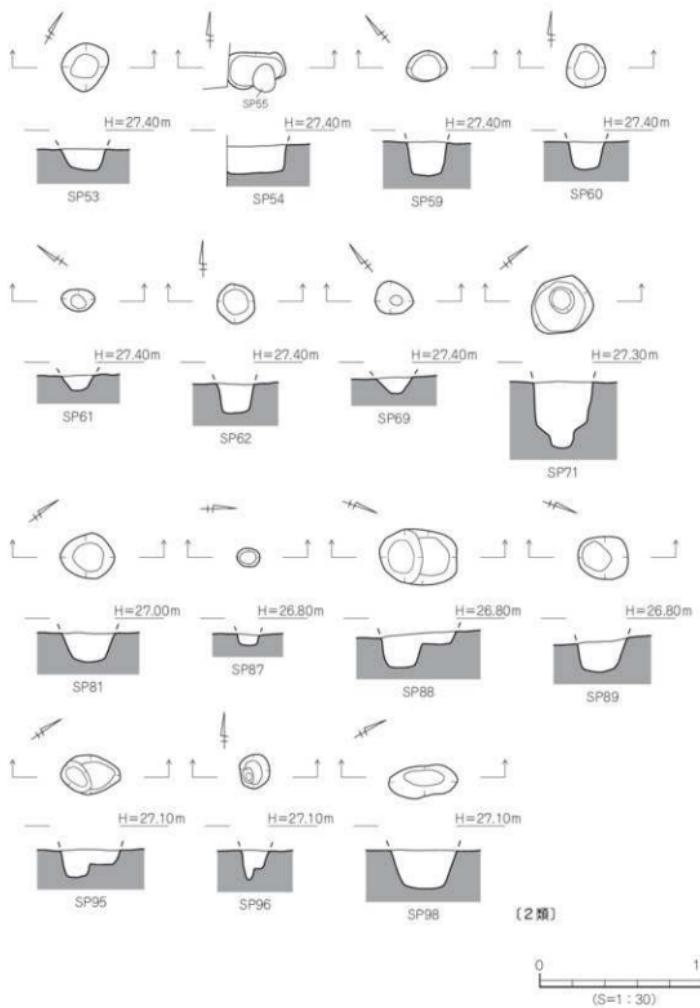
第27図 SD 1

各柱穴からは、弥生時代から中世までの遺物が出土した。1類、2類、3類の柱穴からは中世、4類からは古代、5類と6類からは古墳時代、7類と8類からは弥生時代から古墳時代の土器が出土し、8類の柱穴からは円筒埴輪片などが出土している。ここでは、実測可能な遺物を15点掲載した(第33・34図)。

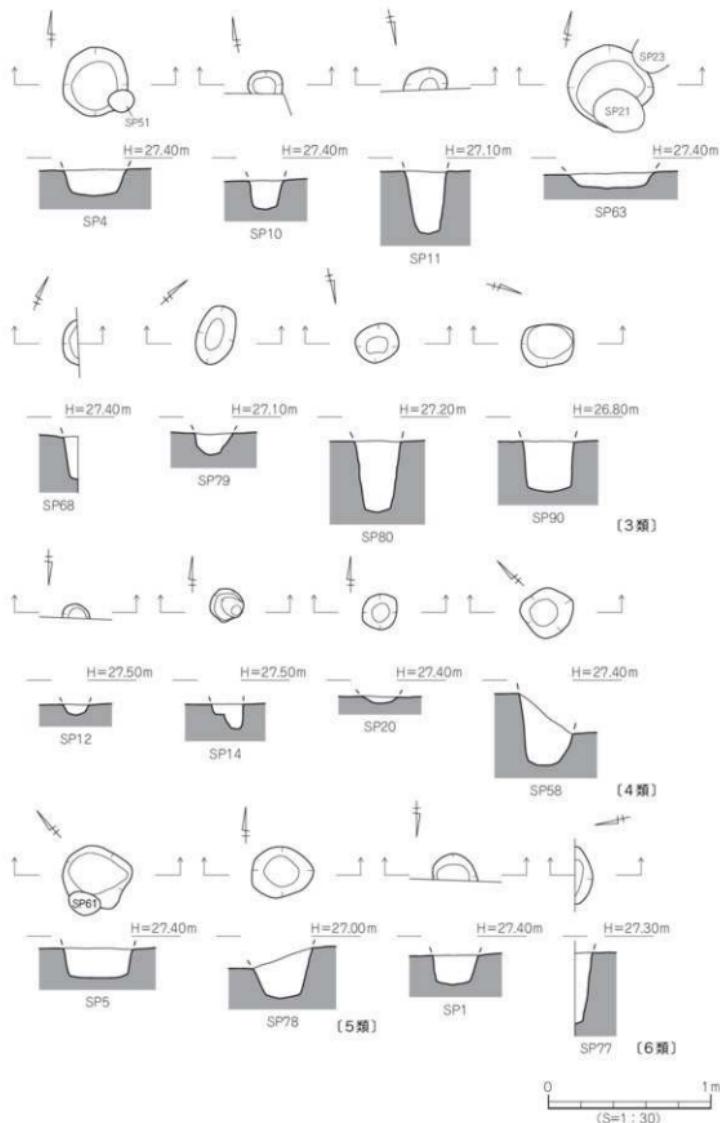
出土遺物 20～22と25は3類、18は6類、17と24は7類、その他は8類の柱穴出土品。16はS P 7(8類)出土の須恵器坏蓋片、17はS P 56(7類)出土の須恵器坏身の底部片、18はS P 77(6類)出土の須恵器壺の胴部片である。18の外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。19はS P 25(8類)出土の円筒埴輪片。須恵質で、断面三角形状の鋭いタガをもつ。20と21はS P 80(3類)出土の土師器土釜。20は口唇部よりやや下がった位置に丸味のある凸帯を貼付け、21は口唇部に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。22はS P 90(3類)出土の土師器坏の底部片で、外面には回転ヘラキリ痕が残る。23～30は弥生土器。23はS P 85(8類)出土の壺形土器。口縁部は外反し、内外面には指頭圧痕が顯著に残る。24はS P 73(7類)出土の壺形土器の肩部片で、外面にはタタキ調整を施す。25はS P 90(3類)出土の複合口縁壺で、口縁部は欠損している。26はS P 85(8類)出土の壺形土器の頭部片で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。27はS P 27(8類)、28はS P 6(8類)、29はS P 86(8類)、30はS P 97(8類)出土品。27～29は壺形土器、30は鉢形土器の底部で、28と29の外面にはタタキ調整を施す。



第28図 柱穴 (1)

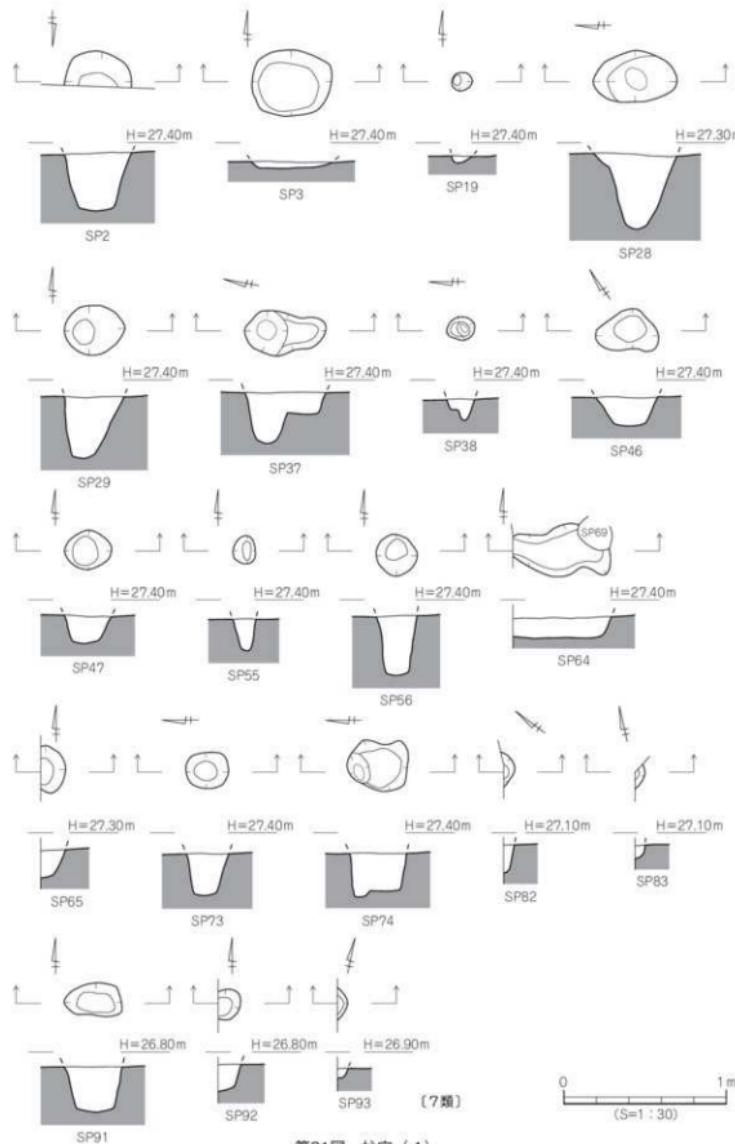


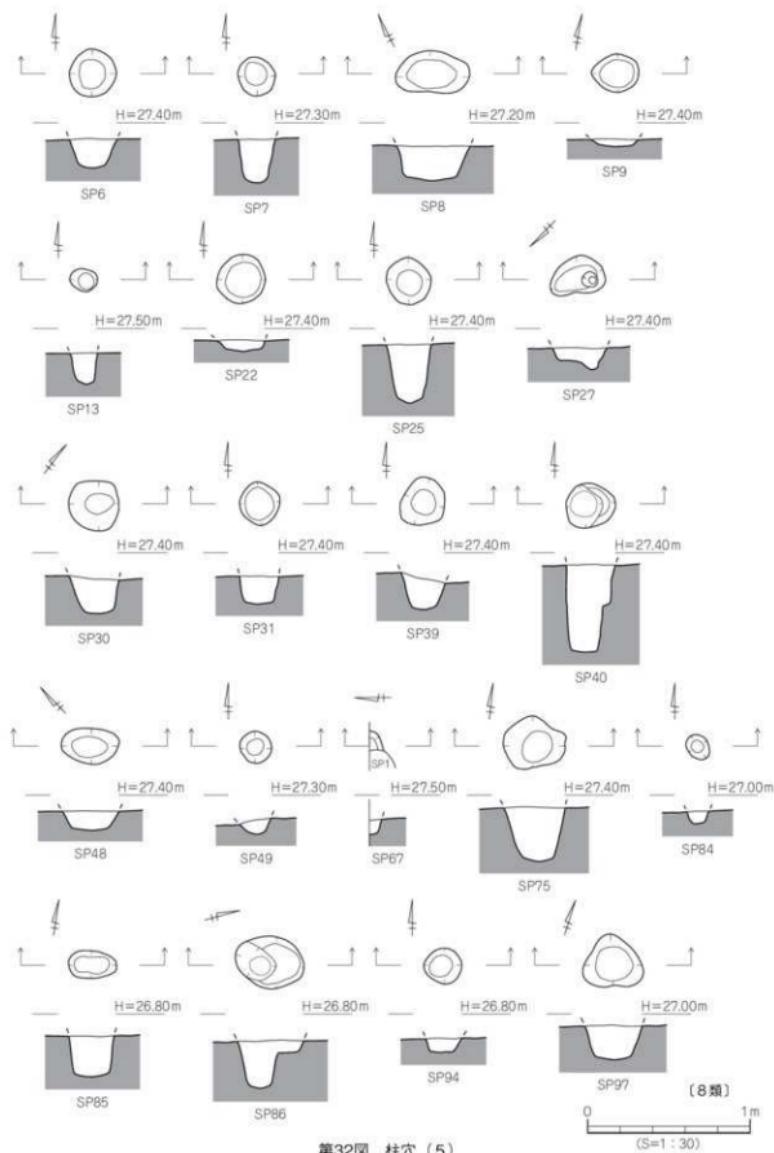
第29図 柱穴(2)



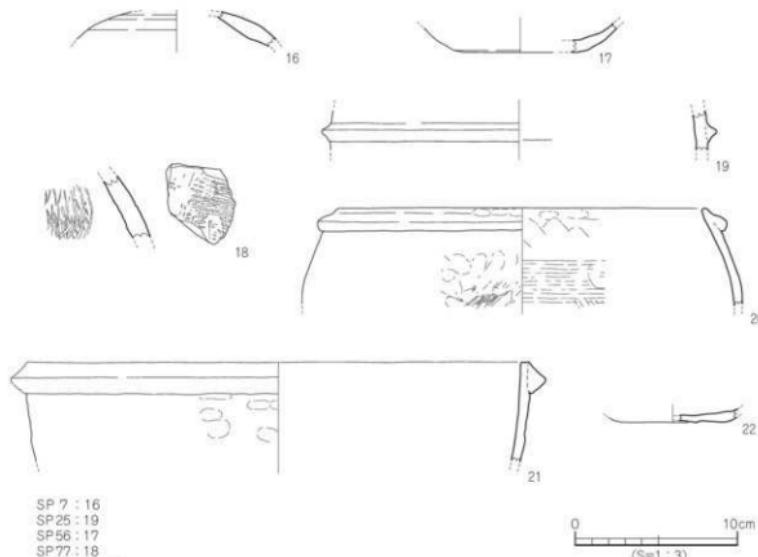
第30図 柱穴 (3)

星岡遺跡3次調査





第32図 柱穴 (5)



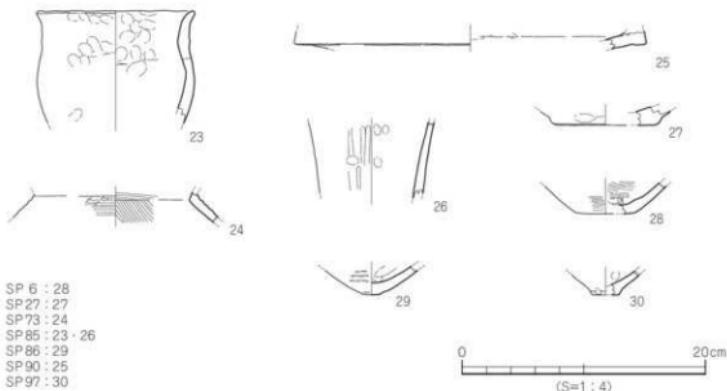
第33図 柱穴出土遺物（1）

(4) 地点不明出土遺物

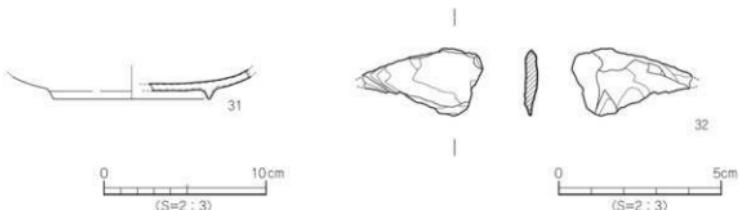
31は搅乱、32は重機による表土掘削時に出土した遺物である。ここでは、地点不明遺物として実測図を掲載した。31は磁器の皿で、断面三角形状の高台をもつ。胎土は灰白色で、全面に緑色釉がかけられている。32はサスカイト製のスクレイバーで、残存長3.8cm、重量2.55gを測る（第35図、図版12）。

第5節　まとめ

調査では古墳時代から中世の遺構と、弥生時代から中世までの遺物を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、柱穴内より後期段階の土器片が少量出土した。検出した柱穴のうち、弥生時代の建物を構成する柱穴はなかったが、近隣に当該期の建物が存在している可能性は高いと思われる。次に古墳時代では、掘立柱建物（掘立1）を検出した。柱列のみの検出であるため、規模や形態は不明であるが、建物址と判断した。柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土したことから、概ね古墳時代後期段階の建物と考えられる。なお、その他の柱穴内からも同時期の遺物が出土しているほか、S P 25からは須恵質の円筒埴輪片が出土した。古代では古墳時代に続き、掘立柱建物を検出した。掘立2は1×2間以上の建物で、柱穴掘り方は方形をなす。柱穴内から古瀬戸の花瓶片のほか、皇宋通寶が出土した。出



第34図 柱穴出土遺物（2）



第35図 地点不明出土遺物

土遺物より平安時代後期、11～12世紀頃の建物と考えられる。なお、古瀬戸の花瓶には故意に打ち欠かれた痕跡が認められたことから、この遺物を使用した建物に伴う祭祀が執り行われたものと推測される。中世では溝を検出した。SD 1からの出土遺物はなく時期特定は難しいが、同様の埋土をもつ柱穴から13～14世紀代の土師器土釜や壺が出土しており、SD 1もこれらの柱穴と同時期の遺構と考えられる。なお、中世遺物が出土した柱穴は多数検出したが、建物を認定するには至らなかった。しかしながら、近隣には当該期の建物や遺構が存在するものと推測される。

今回の調査は近現代の擾乱が激しく、部分的な遺構の検出ではあったが、古墳時代や古代、中世の遺構を検出することができた。このことは、調査地一帯に各時代の集落が存在することを示唆するものであり、今後は、詳細な研究を進め、星岡地区一帯の集落変遷や動態等を解明することが必要と思われる。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、3次調査地検出の遺構と遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載した。
 出土遺物欄 土器名称を略記した。
 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () 内の数値は推定復元値である。
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 口→口縁部、口端→口縁端部、頭→頭部、胴→胴部、
 体→体部、底→底部
 胎土欄 混和剤を略記した。() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成状況を略記した。
 例) ○→良好、○→良

第2表 9次掘立柱建物一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)		
1	(1) × (3)	(南北)	4.50	160・140・150			古墳後期	
2	2 × (1)	東西	1.92	0.94・0.98	0.77	0.77	平安後期	

第3表 9次溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規格 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D 2	レンズ状	2.20 × 0.60 × 0.05	褐色灰色土 (灰褐色土混)		中世	

第4表 9次柱穴一覧(1)

柱穴 (S.P.)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考
1	A 2	円形	0.27 × 0.18 × 0.20	6類	土師・須恵	
2	A 2	円形	0.30 × 0.20 × 0.33	7類	土師	
3	B 2	円形	0.50 × 0.34 × 0.04	7類	土師・須恵	
4	B 1	円形	0.42 × 0.38 × 0.15	3類	弥生・土師	
5	B 1	円形	0.40 × 0.40 × 0.17	5類	弥生・石	
6	B 1	円形	0.28 × 0.28 × 0.40	8類	弥生	
7	B 1	円形	0.22 × 0.22 × 0.03	9類	土師・須恵・石	
8	B 1	楕円形	0.42 × 0.26 × 0.19	8類	陶磁器	
9	A 2	円形	0.28 × 0.23 × 0.03	8類	土師	
10	B 1	円形	0.20 × 0.14 × 0.16	3類	土師・須恵	
11	A 1	円形	0.25 × 0.10 × 0.15	3類	土師・須恵	
12	A 1	円形	0.16 × 0.09 × 0.04	4類		
13	A 1	円形	0.14 × 0.12 × 0.16	8類	土師	
14	A 1	円形	0.21 × 0.20 × 0.11	4類	土師	
15	A 1	楕円形	0.17 × 0.13 × 0.24	2類		
16	A 1	楕円形	0.42 × 0.24 × 0.08	2類	土師	
17	A 1	円形	0.29 × 0.26 × 0.07	1類	土師	
18	A 1	円形	0.12 × 0.12 × 0.13	2類		
19	A 1	円形	0.12 × 0.10 × 0.04	7類		
20	A 1	円形	0.21 × 0.20 × 0.14	4類	土師	
21	A 1・B 1	円形	0.32 × 0.24 × 0.07	1類	土師	
22	A 1	円形	0.30 × 0.30 × 0.05	8類		
23	A 1	円形	0.23 × 0.22 × 0.14	2類		
24	B 2	楕円形	0.34 × 0.25 × 0.07	2類	弥生・土師	
25	A 2	円形	0.28 × 0.26 × 0.23	8類	弥生・須恵・埴輪	
26	A 2	円形	0.30 × 0.30 × 0.14	2類	土師	
27	B 2	楕円形	0.36 × 0.20 × 0.11	8類	土師・須恵	
28	B 2	楕円形	0.50 × 0.30 × 0.50	7類	弥生・土師・須恵	
29	B 2	円形	0.38 × 0.35 × 0.32	7類	弥生	
30	B 2	円形	0.30 × 0.28 × 0.37	8類	土師・須恵	
31	B 2	円形	0.26 × 0.20 × 0.15	8類		
32	B 2	円形	0.27 × 0.20 × 0.15	4類	弥生・須恵	獨立2
33	A 2	円形	0.22 × 0.20 × 0.04	2類		
34	A 2	円形	0.24 × 0.24 × 0.08	2類	弥生	
35	A 2	楕円形	0.28 × 0.19 × 0.16	2類	土師	
36	A 2・B 2	円形	0.28 × 0.27 × 0.28	2類	土師	
37	A 1・B 1	円形	0.24 × 0.23 × 0.14	7類	土師	
38	A 1	円形	0.16 × 0.14 × 0.12	7類		
39	B 1	円形	0.28 × 0.27 × 0.21	8類		
40	B 1	円形	0.30 × 0.27 × 0.52	8類	弥生・須恵	
41	B 1	円形	0.27 × 0.26 × 0.15	2類		
42	B 1	楕円形	0.50 × 0.32 × 0.10	2類		
43	B 1	円形	0.23 × 0.23 × 0.12	2類	弥生・須恵	
44	B 1	円形	0.28 × 0.24 × 0.44	2類	弥生・陶磁器	
45	A 2	楕円形	0.34 × 0.27 × 0.26	2類	弥生	
46	B 1	楕円形	0.38 × 0.26 × 0.16	7類	土師	
47	B 1	円形	0.29 × 0.23 × 0.14	7類	弥生・土師	
48	B 1	楕円形	0.35 × 0.22 × 0.12	8類	弥生・土師	
49	B 1	円形	0.19 × 0.18 × 0.10	8類		
50	B 1	円形	0.18 × 0.14 × 0.11	2類		
51	B 1	円形	0.15 × 0.15 × 0.08	2類		
52	B 1	楕円形	0.50 × 0.23 × 0.36	2類	土師・石	
53	B 1	円形	0.29 × 0.26 × 0.11	2類	土師	
54	A 1	楕円形	0.36 × 0.22 × 0.19	2類	土師	
55	A 1	円形	0.13 × 0.13 × 0.17	7類		

星岡遺跡3次調査

第4表 9次柱穴一覧(2)

柱穴 (S P)	地 区	平 面 形	規 模 長径×短径×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	備 考
56	A 1	円形	0.24 × 0.24 × 0.34	7類	土師・須恵	
57	B 1	円形	0.40 × 0.38 × 0.59	4類	古銭・木	掘立2
58	B 1	円形	0.29 × 0.29 × 0.12	4類	須恵・陶磁器	
59	B 1	円形	0.22 × 0.18 × 0.17	2類	土師	
60	B 1	円形	0.25 × 0.23 × 0.16	2類	弥生	
61	B 1	円形	0.16 × 0.16 × 0.10	2類		
62	B 1	円形	0.24 × 0.24 × 0.18	2類		
63	A 1	円形	0.50 × 0.50 × 0.08	3類		
64	B 1	椭円形	0.60 × 0.25 × 0.15	7類	土師・須恵	
65	B 1	円形	0.29 × 0.14 × 0.11	7類	弥生・土師	
66	A 2	椭円形	0.34 × 0.17 × 0.08	1類		
67	A 2	円形	0.11 × 0.09 × 0.08	8類		
68	A 2	円形	0.25 × 0.14 × 0.22	3類		
69	B 1	円形	0.19 × 0.19 × 0.12	2類		
70	B 2	円形	0.29 × 0.27 × 0.35	4類	弥生・陶磁器	掘立2
71	B 2	円形	0.40 × 0.35 × 0.43	2類	弥生・須恵	
72		(欠番)				
73	B 1	円形	0.29 × 0.24 × 0.24	7類	弥生・土師・石	
74	B 1	椭円形	0.40 × 0.30 × 0.22	7類	弥生	
75	B 1	円形	0.36 × 0.32 × 0.18	8類	弥生・土師	
76	B 1	椭円形	0.34 × 0.24 × 0.10	4類		掘立2
77	C 1	円形	0.36 × 0.10 × 0.44	6類	須恵	
78	C 1	円形	0.38 × 0.32 × 0.59	5類	石	
79	C 1	円形	0.47 × 0.20 × 0.25	3類		
80	D 2	円形	0.30 × 0.13 × 0.41	3類	土師	
81	D 2	円形	0.29 × 0.27 × 0.16	2類		
82	E 2	円形	0.13 × 0.08 × 0.16	7類		
83	E 2	円形	0.11 × 0.05 × 0.08	7類		
84	D 1	円形	0.15 × 0.13 × 0.06	8類		
85	E 1	椭円形	0.26 × 0.17 × 0.28	8類	弥生	
86	E 1	椭円形	0.43 × 0.32 × 0.28	8類	弥生	
87	E 1	円形	0.13 × 0.10 × 0.06	2類		
88	E 1	椭円形	0.47 × 0.35 × 0.24	2類	土師・須恵	
89	E 1	円形	0.30 × 0.25 × 0.18	2類		
90	E 1	円形	0.31 × 0.25 × 0.31	3類	弥生・土師	
91	E 1	椭円形	0.35 × 0.19 × 0.26	7類	土師・石	
92	E 1	円形	0.18 × 0.13 × 0.15	7類	弥生・土師	
93	E 1	円形	0.18 × 0.05 × 0.05	7類		
94	D 1	円形	0.22 × 0.20 × 0.13	8類		
95	D 2	椭円形	0.37 × 0.25 × 0.15	2類		
96	D 2	円形	0.21 × 0.17 × 0.18	2類		
97	D 2	椭円形	0.35 × 0.31 × 0.48	8類	弥生	
98	D 2	椭円形	0.41 × 0.19 × 0.21	2類	土師	
99	D 2	円形	0.78 × 0.76 × 0.21	6類	須恵・石	掘立1
100	B 2	円形	0.70 × 0.69 × 0.06	5類		掘立1
101	B 2	円形	0.90 × 0.75 × 0.22	5類	弥生・土師・須恵	掘立1
102	B 2	円形	0.53 × 0.31 × 0.21	6類	弥生	掘立1

第5表 9次掘立1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (25.5) 残高 3.2	外反口縁。口縁端部は「コ」字状。 小片。	①②ヨコナデ ③ハケ	ハケ→ミガキ	橙色 褐色	石・長 (1~2) 金○	SP101	
2	壺	残高 6.4	柱部に径 0.6cm 大の円孔を有す。	ミガキ→ナデ	ハクリ(マツフ)	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) 金○	SP101	
3	壺	底径 4.3 残高 1.8	丸底。底部完存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP99 自燃	
4	甕	口径 (14.0) 残高 8.6	「く」の字状口縁。口縁端部は上方 に肥厚。	①ナデ ②ハケ5~6本/cm	③ナデ ④板ナデ	黄褐色 橙色	石・長 (1~2) 金○	SP101	8
5	甕	残高 10.5	小片。	ハケ (8本/cm)	ナデ	にぶい橙色 灰黄色	石・長 (1~2) 金○	SP101	
6	壺	口径 (15.8) 残高 5.1	大頭壺。口縁部は複く外反し、口縁 端部は「コ」字状に仕上げる。	①ヨコナデ ②ハケ3~4本/cm	ハケ (3~4本/cm)	橙色 灰白色	石・長 (1~2) 金○	SP101 黒斑	
7	壺	残高 2.5	肩部片。刻目あり。	ハケ (5本/cm)	ナデ	橙色 灰白色	石・長 (1~2) 金○	SP101	
8	壺	残高 7.3	貼合凸縁 1 条、凸縁上にハケ状工具 による刻目あり。1/4 の残存。	ハケ (10 本/cm)	ナデ・ハケ	蒸褐色 褐色	石・長 (1~3) 金○	SP101	8
9	壺	残高 2.5	肩部片。2 条以上のヨコ沈線文あり。	ハケ (3 本/cm)	ナデ	褐色 蒸褐色	石・長 (1~2) 赤色土粒 金○	SP101	
10	鉢	残高 9.1	長胴。1/2 の残存。	ミガキ	ナデ(指頭圧痕)	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金○	SP101 黒斑	8
11	甕	底径 (4.4) 残高 2.4	平底。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 暗灰黄色	石・長 (1~2) 金○	SP101	
12	壺	底径 (7.5) 残高 3.9	平底。小片。	ハケ	ナデ	灰色 黄灰色	石・長 (1~2) 金○	SP101 黒斑	
13	壺	底径 (7.0) 残高 7.6	平底。小片。	ハケ (4 本/cm)	ナデ→ハケ	橙色 黄灰色	石・長 (1~2) 金○	SP101 黒斑	

第6表 9次掘立2出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	花瓶	残高 7.5	古漁戸。内面には釉薬が部分的に付 着。	ナデ	ナデ	綠色 灰白色	(灰白色) 密 ○	SP70	8

第7表 9次掘立2出土遺物観察表（銭貨）

番号	銭名	初鑄年	錢徑 (cm)	孔徑 (cm)	外緣厚 (cm)	内緣厚 (cm)	重量 (g)	備考	図版
15	皇宋通寶	1039 年	2.45	0.70	0.10	0.08	1.741	SP57	8

星岡遺跡3次調査

第8表 9次柱穴出土遺物観察表（土製品）

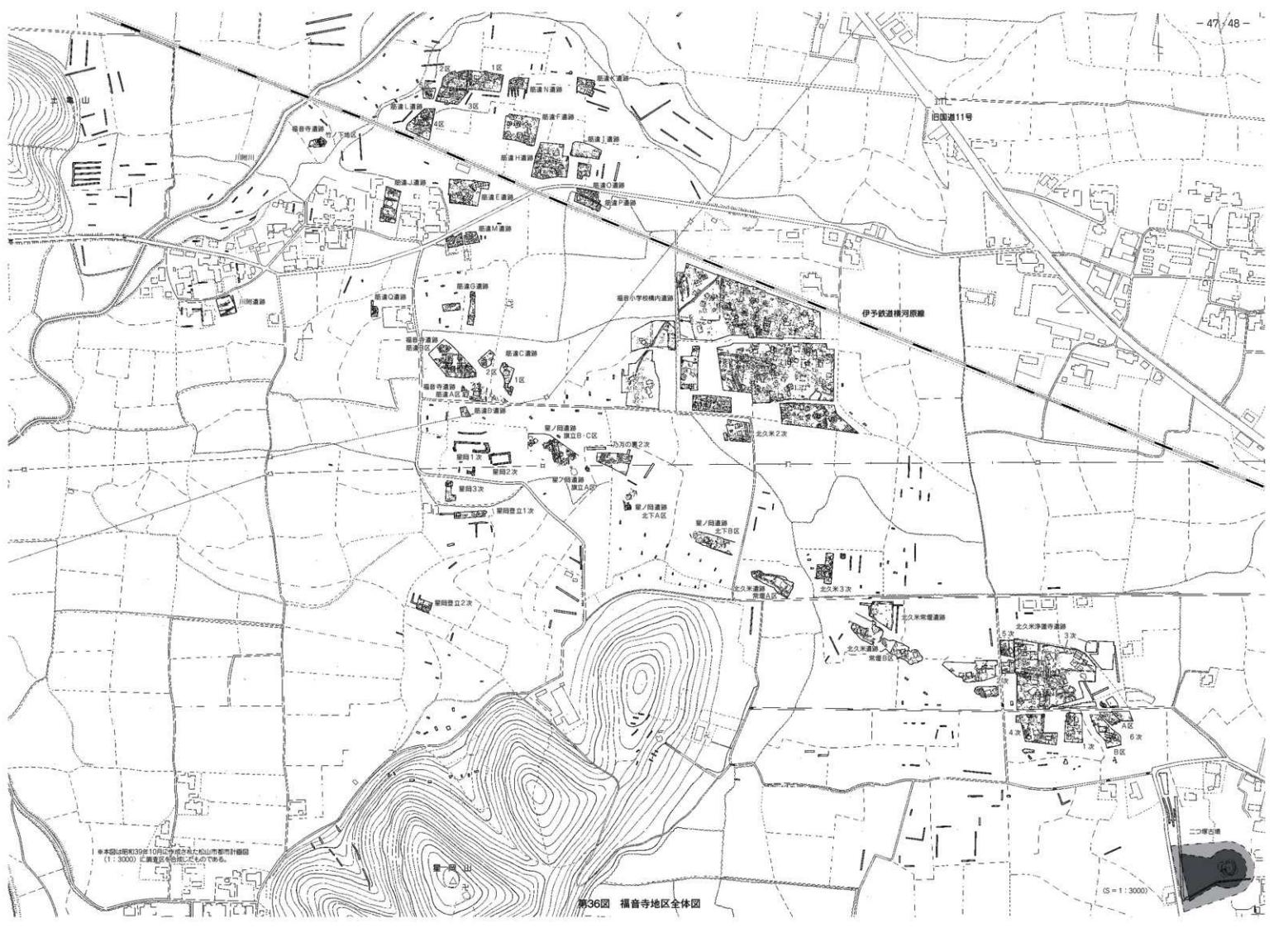
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
16	环盖	残高 21	天井部小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP 7	
17	环身	底径 (7.0) 残高 18	底部小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○	SP56	
18	甕	残高 37	肩部小片。	平行叩き	円弧叩き	灰色 灰色	密 ○	SP77	
19	円筒埴輪	残高 24	須恵質。断面三角形の鋸の刃を貼付。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	SP25	8
20	土釜	口径 (22.4) 残高 60	口唇部よりやや下がった位置に丸味のある断面三角形の凸部を貼付。小片。	①ヨコナデ ②ナデ ③ハケ(4本/cm)	①ナデ ④側面	褐色 褐色	石・長(1) 褐色土焼 ○	SP80	
21	土釜	口径 (30.9) 残高 61	口唇部に断面三角形状の凸部を貼付。小片。	①ヨコナデ ②ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1) ○ 黒度	SP80	8
22	坏	底径 (6.4) 残高 08	底部片。1/4の残存。	ヨコナデ ③回転ヘラキリ	ヨコナデ	茶褐色 暗褐色	密 ○	SP90	
23	甕	口径 (12.7) 残高 92	短く外反する口縁部。1/4の残存。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○	SP85	8
24	甕	残高 25	肩部小片。頭部内面に棱あり。	タタキ	ハケ(5本/cm)	橙色 黄褐色	石・長(1~2) ○	SP73	
25	壺	残高 15	複合口縁壺。口縁拡張部は欠損。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○	SP90	
26	壺	残高 63	頭部片。1/4の残存。	ミガキ	ナデ	にぶい褐色 にぶい・橙色	石・長(1) ○	SP85	
27	甕	底径 (8.6) 残高 15	わずかに突出部をもつ平底。	ナデ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1~3) ○	SP27	
28	甕	底径 (4.9) 残高 25	平底。小片。	タタキ	ハケ(5本/cm)	橙色 褐色	石・長(1~2) ○	SP 6	
29	甕	底径 10 残高 23	小さく突出する平底。底部完存。	タタキ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○	SP86	
30	鉢	底径 (2.1) 残高 20	突出部をもつ平底。小片。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長(1~2) ○	SP97	

第9表 9次地点不明出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
31	皿	底径 (9.6) 残高 21	磁器。断面三角形状の高台。全面緑釉(緑色釉)。小片。	ナデ	ナデ	绿色 绿色	(灰白色) 密 ○	カクラン	8

第10表 9次地点不明出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
32	スクレイパー	ほぼ定形	セヌカイト	(3.80)	2.00	0.35	2.55		8



第36図 福音寺地区全体図

写真図版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、 35mm 判フィルムカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパー・アンギュロン 90mm 他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm 他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28 ~ 85mm 他
フ イ ル ム	白 黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、 4×5 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ メ ラ	トヨビュ- 45G
レ ン ズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド 101
フ イ ル ム	ネオパン・アクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引 伸 機	ラッキー 450MD・90MS
レ ン ズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印 画 紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製 版：写真図版 175 線

印 刷：オフセット印刷

用 紙：

【参考】『埋文写真研究』vol1 ~ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol1 ~ 5

〔大西 朋子〕

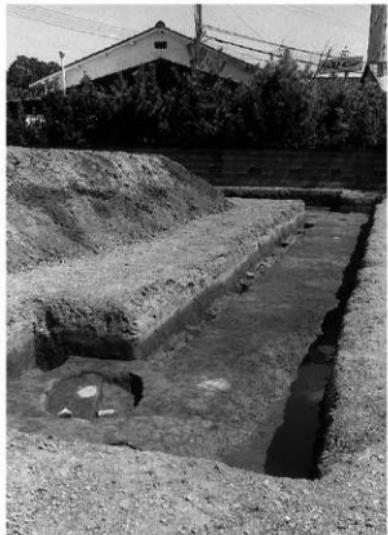


1 1次調査地遠景(北より)



2 T 1西部調査状況(東南東より)

図版 2



1 T1 西部検出状況(西より)



2 S B007周辺検出状況(北北西より)



3 T1 北壁土層(南西より)



4 S B001-002カマド断面(南西より)

星岡遺跡 1次調査

図版 3



1 T2全景(東より)



2 挖立002・003調査状況(東より)



3 T3全景(北より)

図版
4



1 捩立001(北より)



2 S B005床面(北西より)

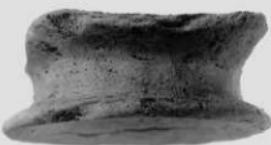


1 1次調査出土遺物(1)

図版
6



25



28

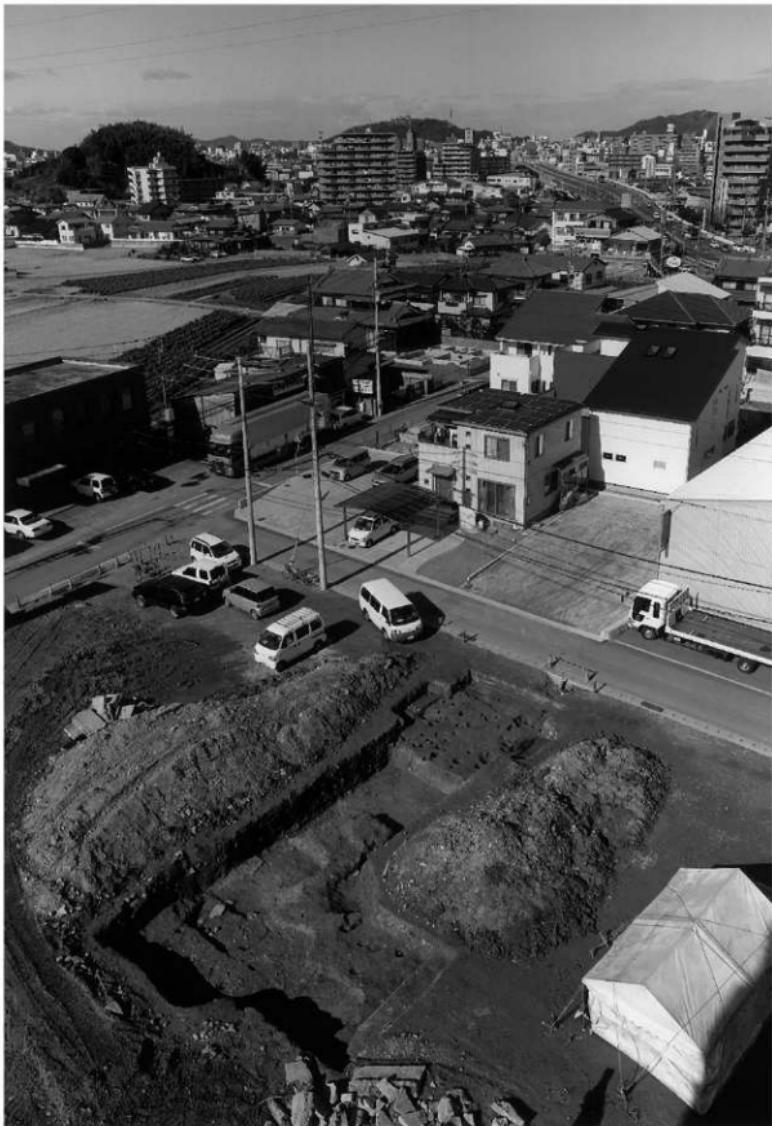


13



22

1 1次調査出土遺物(2)



1 3次調査地から松山城を望む(南東より)

図版 8



1 調査区全景(南東より)



2 北部発掘状況(北より)



1 調査区北部から1次調査地を望む(南西より)



2 調査区北端検出状況(南西より)

図版
10



1 南壁土層と擾乱状況(北より)



2 調査区南部発掘状況(南東より)



1 着手前の全景
(南東より)



2 造成土掘削状況
(北より)



3 作業状況(北より)

図版
12



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ほしおかいせき1じ・3じちょうさ					
書名	星岡遺跡1次・3次調査					
副書名						
卷次						
シリーズ名	松山市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第178集					
編著者名	橋本雄一・水本完児・大西朋子					
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター					
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67-6 TEL (089) 923-6363					
発行年月日	西暦2015(平成27)年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 (m ²)
星岡遺跡1次	松山市星岡一 丁目630番1・ 634番1の一部	38201	33°49'13.726"	132°47'15.052"	20070910 20071009	約124m ²
星岡遺跡3次	松山市星岡一 丁目602番1の 一部	38201	33°49'12.261"	132°47'14.287"	20101201 20110107	約138m ²
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
星岡遺跡1次	集落	弥生 古墳 古代	竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建物・ 土坑 掘立柱建物	弥生土器・石器 須恵器・土師器	福音寺地区の大集落の 縁辺部に、8世紀代以 降の掘立柱建物が一定 程度存在することが明 らかとなった。	
星岡遺跡3次	集落	古墳 古代 中世	掘立柱建物・溝 掘立柱建物 柱穴	須恵器・土師器・弥生土器 須恵器・古瀬戸・皇宋通寶	掘立柱建物の柱穴か ら、古瀬戸の花瓶と皇 宋通寶が出土した。	
要約	古墳時代の集落遺跡として知られる福音小学校構内道路から南西300mほどに位置する星岡遺跡の発掘調査報告書である。国庫補助を受けて調査と整理を実施した2回の調査について記載している。第1回は「第154集」にて報告している。両調査地とも福音小学校構内道路を中心とする古墳時代中期の大集落の西南縁辺部に近い場所に立地しており、高い密度で遺構が検出された。以前から知られていたことではあるが、奈良時代や平安時代前期の掘立柱建物や土坑が少ながらずに検出されたことに注目している。いずれも狭小な調査区ではあるが、一定程度、当該期の遺物が検出される状況から、久米官街の下部階級などが近くに存在したのではないかと想像している。また、両調査地付近は、近世久米郡の岩石井村が同郡の旧久米村にいくつものように新しく張り出した場所に立地しているが、これは貴高地の縁辺部で地下水位が高い当該地周辺を石井村が水源として取り込んだ結果ではないかと想像している。「第154集」にて指摘した近傍の小さな泉と浅い谷底の地形に引き続き着目することによって、中近世にとどまらず古代の集落についても、その立地のあり方を説明できないか検討を行っている。					

松山市文化財調査報告書 第178集

星岡遺跡

1次・3次調査

平成27年3月31日発行

発行 松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL(089)948-6605

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6

TEL(089)923-6363

印刷 株式会社明朗社

〒791-2112 伊予郡砥部町重光150-1

TEL(089)958-6868
